

たま・まちづくり研究会の概要と研究報告2

石田 光規・大槻 茂実・脇田 彩・井上 公人・林 浩一郎

6 住民の生活圏と親密圏

本節では、質問紙調査の問4、5を使って住民の生活圏および交通手段の利用頻度、問1～3および問12を使って住民の親密圏を検討する。駅への距離や開発経験は、生活圏や親密圏に影響を与えているのであろうか。

6-1 住民の生活圏

6-1-1 住民の行動範囲

本調査では、日用雑貨・食料品の購入、家電・家具の購入、病院・診療所の利用、服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出の6項目について、それぞれどこで行うことが多いのか特定した。地区については、徒歩・自転車圏内、多摩市内、隣接市、東京23区内、それ以外の東京都、神奈川県、移動・通信販売、その他の8項目から特定した。本報告書では、徒歩・自転車圏内、多摩市内、東京23区内、それ以外の東京都、その他と簡略化した5項目を掲載する。

結論を先取りして言えば、各地区の住民の行動範囲は立地条件、すなわち、駅へのアクセスと住宅階層によって強く規定されていた。立地条件に強く規定されるのは、生活に身近な消費またはサービスの利用であった。すなわち、日用雑貨・食料品の購入、家電・家具の購入、病院・診療所の利用は駅（中心繁華街）へのアクセスに強く規定されていた。

一方、ハレの場の消費と考えられる服飾品の購入や気分転換の外出および友人との会食は階層性に規定される側面があった。以下、それぞれ別に見てゆこう。

(1) 生活に身近な消費

図6-1～6-3はそれぞれ日用雑貨・食料品、家電・家具、病院・診療所のおも購入先および利用先を地区別に示している。この図を見ると、日用雑貨や食料品のような生活必需品および家電・家具の購入先、通院先は、いずれも中心繁華街へのアクセスに強く規定されていることがわかる。すなわち、ターミナルへのアクセスに規定されているのである。

エリア内に聖蹟桜ヶ丘駅を含む関戸では、生活必需品、家電・家具、病院いずれにおいても「徒歩・自転車圏内」と答えた人が最も多く、また、他の地区に比べても徒歩圏内で済ませられる用事が多い。次いで、徒歩・自転車圏内の回答が多いのが、南の玄関口、多摩センター駅へのアクセスがよい鶴牧である。こちらも、他の地区に比べ、徒歩・自転車圏内の回答が多い。

図 6-1 日用品・食糧の購入先

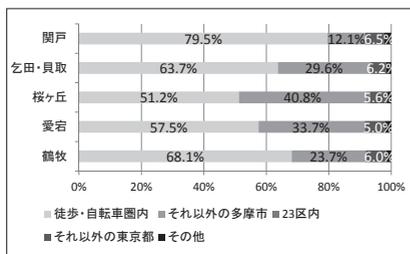


図 6-2 家電・家具の購入先

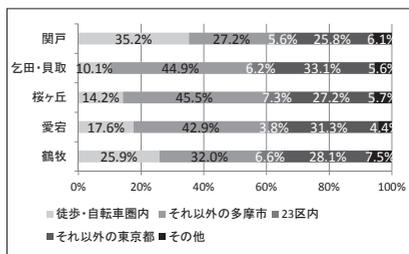
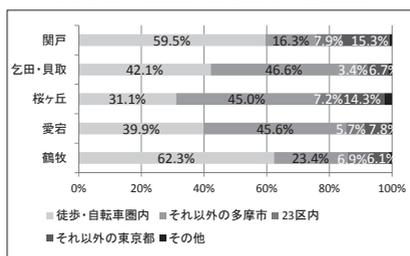


図 6-3 病院・診療所の通院先



それと対照的なのが、バスに乗らなければ駅に出られない桜ヶ丘と愛宕である。この二つの地区は、生活必需品の購入、家具・家電の購入、通院のい

ずれにおいても、相対的に多摩市内と回答する人が多い。つまり、バスまたは車に乗らなければ買い物も通院もおぼつかないのである。一方、乞田・貝取は駅からやや離れているものの、歩いて多摩センターまたは永山まで行くことも可能である。そのような事情を反映して、桜ヶ丘、愛宕よりもやや徒歩・自転車圏内での行動が多い。

ここから二つの示唆を得ることができる。第一は近隣住区構想の挫折である。桜ヶ丘にはあてはまらないものの、多摩ニュータウンの住区の一つである愛宕は近隣住区構想のもと設計された。本来、この構想に従えば、徒歩圏内で多くの用事は済むはずであり、実際に、愛宕にも商業施設などをそろえた近隣センターは設置されている。また、桜ヶ丘は近隣住区構想に則ったわけではないものの、徒歩圏内で生活必需品を手に入れられるよう町の設計がなされている。地区の中心のロータリーには商店街、駐在所、集会所が建てられているのである。

しかし、今回の分析結果は、住民が必ずしも都市計画者の思惑通りには行動しないことを示している。桜ヶ丘および愛宕では、日用品や食料品といった生活必需品ですらも、徒歩・自転車圏内で購入する人は半分強に過ぎない。したがって、施設をそろえたからといって住民が必ずしも“その通り”に動くわけではない。計画者の思惑は住民に簡単に踏みにじられてしまうのである。

第二はフードデザート問題の発生である。桜ヶ丘と愛宕の二つの地区は、いずれも調査エリアの中でも坂が多く、移動にはあまり適さない。また、二つの地区は多摩市のなかでも高齢化が進んだエリアである。移動しにくいところに住む高齢者は、近い将来「買い物難民」と化する可能性がある。計画的に作られたはずの住区は、まちの衰退とともに買い物難民をも生み出しているのである。

(2) ハレの状況における消費

服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出といった“ハレ”の場の消費については、立地に加え、階層性に規定されている。図6-4～6-6はそれぞれの地区別の利用先である。

図 6-4 服飾品の購入先

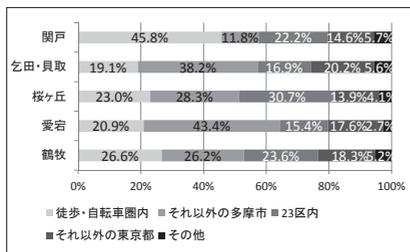


図 6-5 友人との会食先

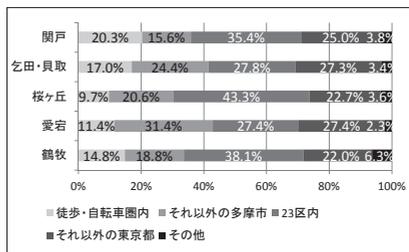
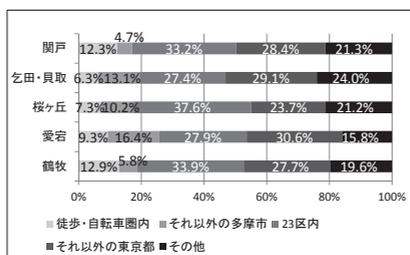


図 6-6 気分転換の外出先



服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出いずれにおいても、聖蹟桜ヶ丘駅および多摩センター駅へのアクセスのよい、関戸と鶴牧は他の地区に比べ徒歩・自転車圏内が多い。つまり、日常の用事のみならず、ハレの場の消費もある程度は徒歩・自転車圏内で済んでしまうのである。したがって、両地区は多摩市内でも非常に恵まれた立地だと言えよう。また、乞田・貝取で徒歩・自転車圏内の会食が多いのは、当該地区が既存住民の最も多い混在地区であるゆえ、歩いて会いに行ける友人が多いからだろう。

服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出いずれにも共通しているもう一つの要素は、23区の利用の多さである。日用品や家具・家電の購入、通院に比べると、格段に23区の利用が増えている。この23区の利用者を詳細に検討すると、地区の特徴がより明確になる。以下、簡単にまとめよう。

第一の特徴は、鉄道へのアクセスのよい地区の二重の利点である。ハレの場の消費において、関戸、鶴牧はいずれも23区利用者が多い。これは、両地区がいずれも、23区内に通じる鉄道駅へのアクセスがよいからだろう。つまり、関戸と鶴牧は鉄道駅周辺の繁華街の利用に加え、23区の利用とい

う2つの側面で“恵まれている”のである。

第二は住宅階層である。これについては、相対的に駅から遠い桜ヶ丘と愛宕を比較するとわかりやすい。まず、桜ヶ丘である。桜ヶ丘は服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出いづれにおいても、23区利用者が最も多い。相対的に鉄道へのアクセスの悪い桜ヶ丘のこの数値は、階層の高い戸建て地区の都心重視傾向を表している。ハレの場の消費において、彼ら／彼女らは多摩市内や東京市部よりも23区を優先するのである。

対照的なのが愛宕である。愛宕地区は服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出において、多摩市内の利用者（徒歩・自転車圏を含む）が多く、23区の利用者が少ない。つまり、あまり市外に出ないのだ。

あえて23区を利用する桜ヶ丘の住民と市内からあまり出ない愛宕の住民。この違いは恐らく住宅階層に起因しよう。つまり、戸建て地区の住民の高度な消費志向が、ハレの場における消費において、彼ら／彼女らを23区に向かわせるのである。本分析の結果は、消費の品目に応じて住民の行動圏は変化すること、およびその行動圏は住宅階層により規定されることを示している。

(3) まとめ

以上まとめると、住民の消費傾向は地区の繁華街または鉄道駅へのアクセスのよさ、および住宅階層に強く規定されていると言えよう。日用品の購入や通院、家具・家電の購入において、繁華街へのアクセスのよい関戸と鶴牧は徒歩・自転車で済ませられる人が多い。一方、立地に恵まれない桜ヶ丘および愛宕では徒歩圏内で済ませられる用事は少なく、バスや自家用車といった移動手段が必要となる。このアクセスによる格差は、1) 近隣住区構想の挫折および2) フードデザート問題の発生を想起させる。

次に、服飾品の購入、友人との会食、気分転換の外出といったハレの場における消費である。これについては、鉄道駅へのアクセスのよい人びとは、徒歩圏内のみならず23区の利用者も多かった。したがって、駅周辺に住む人びとは徒歩圏内と23区内を使い分ける自由を享受していると言えよう。日常生活における消費のみならず、ハレの場における消費でも立地の良さは

強みを発揮する。

しかし、ハレの場の消費は立地のみに規定されるわけではない。東京23区の利用者が最も多いのは、戸建て住宅の開発地区、桜ヶ丘であった。対照的に23区利用者が最も少ないのは公営団地の林立する愛宕である。ここからハレの場の消費の行動圏は、階層に強く規定されていると言えよう。高階層のんびりとして多摩市は、消費の場としての魅力に乏しいのである。

6-1-2 住民の交通手段

次に住民の交通手段を見てみよう。本調査では、自家用車・バイク、電車、路線バスの利用頻度について、週の半分以上、週に1度くらい、月に1度くらい、半年に1度ほど、それ以下・つかわない、の選択肢から特定している。図6-7～6-9は地区別の利用頻度のまとめである。まず、自家用車・バイクと路線バスの利用頻度から見てみよう。

図 6-7 自家用車・バイクの利用頻度

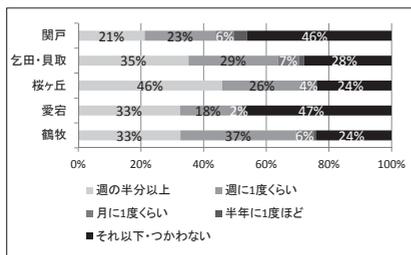
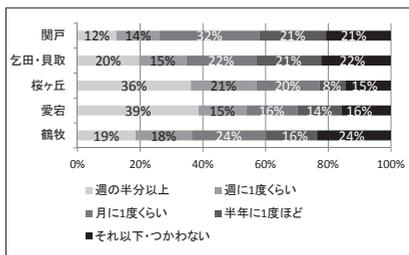
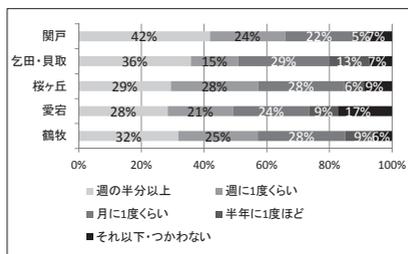


図 6-8 路線バスの利用頻度



注 半年に1度の数値は表示していない

図 6-9 電車の利用頻度



自家用車・バイクおよび路線バスの利用頻度は、立地的に最も恵まれた関戸でいちばん少ない。対照的に駅から離れた桜ヶ丘と愛宕は路線バスの利用が多い。バスルートの確保はこれらの地区の人びとにとって切実な生活問題なのである。

しかしながら、自家用車・バイクの利用頻度は、桜ヶ丘と愛宕でかなりの開きがある。桜ヶ丘の自家用車・バイクの利用頻度は、他地区に比べて頭一つ抜けている。一方、愛宕の利用頻度は、「週に1度くらい」までも含めると、鶴牧や乞田・貝取よりも少ない。反対に「使わない」と答えた人は、関戸を上回って一番多く、住民のほぼ半数におよぶ。われわれはここにも、消費傾向と同様の、住宅階層問題を見出すことができる。

階層的にも条件不利層の多い愛宕の住民は、そもそも車を「所有しない」のである。したがって、路線バスの運行は愛宕に住む人びとにとって死活問題だと言ってよい。戸建て地区と賃貸・公営団地地区において、駅から離れることの意味合いは、似ているようで異なっている。

次に電車の利用頻度を見てみよう。電車の利用頻度は立地条件との関連を想起させる。すなわち、最も立地条件のよい関戸の利用頻度が高く、次いで、駅まで歩いて行くことのできる乞田・貝取、鶴牧が続く。駅まで徒歩・自転車圏内に位置する地区は、総じて電車通勤者が多いのだろう。

まとめると、住民の利用する交通手段も、概ね駅までの立地条件と住宅階層に規定される。すなわち、駅に近いところに立地する地区は電車の利用が多く、遠い地区は路線バスの利用が多い。しかし、自家用車・バイクの利用については、住宅階層に規定される。同じように駅から遠いところに位置していても、高階層の人の多い桜ヶ丘では、自家用車・バイクの利用頻度が高く、中・低階層の多い賃貸・公営団地地区では、自家用車・バイクを使わない人が多い。

6-2 住民の親密圏

6-2-1 近所づきあい

住民の近所づきあいは、実際の付き合いについて4段階で尋ねた質問と、

付き合い方の希望について4段階で尋ねた質問に加え、病気の世話、日常の用事、悩み事の相談、気晴らしのサポート人数を特定した。まず、近所づきあいの理想と現実について、実際の付き合いを尋ねた問1と付き合い方の希望を尋ねた問12から検討しよう。

(1) 近所づきあい——理想と現実

図6-10 住民の近所づきあい（現状）

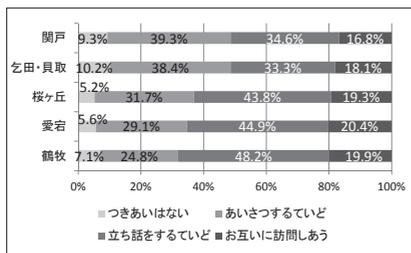


図6-11 住民の近所づきあい（希望）

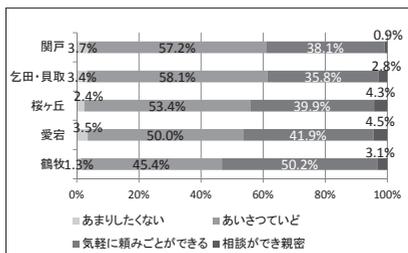


図6-10は住民の近所づきあいの現状を地区ごとにまとめている。地区ごとに住民の近所づきあいの傾向を見ると、既存地区よりも一括開発地区のほうがつきあいが活発であることがわかる。一括開発地区では6割以上の人が近所の人と「お互いに訪問しあう」または「立ち話をする」関係を築いている。一方、既存地区では、訪問や立ち話の関係はほぼ半数しかない。

本来近所づきあいが活発だと考えられる既存地区で近所づきあいが少ない理由は、住民層に求められる。第一分冊でも振り返ったように、既存地区は、「昔ながら」の住民も住んでいるとはいえ、大半は賃貸または分譲の集合住宅に住む新住民である。集会所ももたない集合住宅に住む人びとの近所づきあいは総じて希薄である。彼ら／彼女らの存在が既存地区における近所づきあいの平均を下げているのであろう。

とはいえ、どの地区においても2割前後の人は、互いに訪問しあう関係もっている。その一方「つきあいはない」という人は5%～10%くらいである。他の自治体と比較しているわけではないので、断定はできないが、近所づきあいが極めて少ないわけではなかろう。

そこで、次に図6-11から、住民が希望する近所づきあいを検討する。こ

ちらも、実際のつきあいと同様に、既存地区でのつきあいの希薄さが目立つ。6割以上の人々が「つきあいはしたくない」または「あいさつていど」でよいと考えている。一括開発地区は分譲集合、賃貸・公営、戸建ての順にあまり濃密でないつきあいを望む人が増える。

一般的な傾向をみると、分譲団地の住民を除くと、多くの人々は「あいさつていど」のつきあいを望んでいる。その一方で、「相談ができるような親密な」つきあいを望む人はほとんどいない。ここから、郊外地区に住む人びとが望む近所つきあいは、“さらっとした”ものであることがわかる。こうしたなかに「いざというときに頼れる」ような互助的関係は作れるのだろうか。地域づくりを検討するさいには、上述の点に留意しなければなるまい。

(2) 住民の近隣ネットワーク

次に、住民が近隣にどの程度のサポートネットワークを築いているのか。問2の質問から検討しよう。この質問は、病気の時の身の回りの世話、買い物など日常の用事、個人的な悩みの相談、気晴らしのおしゃべり・外出の各項目に対して、同居家族を除く近所（徒歩、自転車で行ける範囲）の人びと何人に頼れるのか尋ねている。図6-12は、地区ごとの平均値のグラフを表し、図6-13はサポート人数が0人～2人と答えた人の比率である。

図 6-12 近隣住民のサポート人数

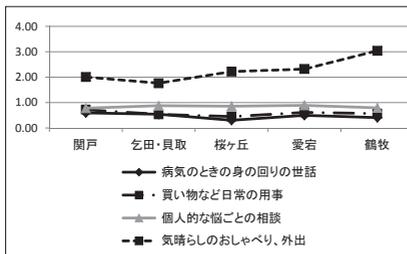
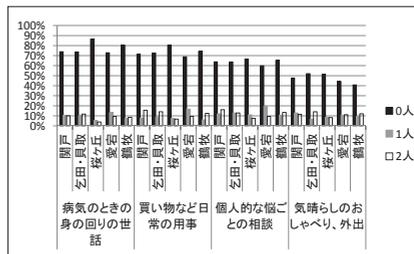


図 6-13 サポート人数の分布



この図を見ると、いずれの地区の人びとも気晴らしのおしゃべり・外出以外では、近隣の人びとにほとんど頼らないことがわかる。病気の時の世話、

買い物など日常の用事、悩み事の相談の平均値はいずれも1を下回っており(図6-12)、サポート人数0人の人は病気の世話、日常の用事、相談いずれにおいても、6割を超える(図6-13)。ここから、住民は生活上の用事や相談で近隣住民をアテにすることはほとんどない、と言える。

「気晴らし」については地区平均も2をこえるくらいになり、他の項目よりも人数は多い。これらの一連の結果は、住民は近所と“さらっとした付き合い”を望むとする先の結果と合致する。しかしながら、図6-13を見ると、気晴らしの関係がない人も全体の5割程度を占めており、多くの住民は近隣と気晴らしの付き合いすらもたないことがわかる。ここから、近所づきあいは、まさに、それを望む人がもつ“嗜好品”だと言えよう。

最後に、地区別の違いを確認しておこう。地区別に見ると桜ヶ丘ではサポート人数0人の人が多い。この結果は「この地区の人はみんな自分で何とかしようとする」という聞き取り調査の結果と合致する(石田 2015)。また、分譲、公営を問わず、団地の住民の気晴らしの関係は、他の地区よりも多い。したがって、団地の“人間関係が薄い”と簡単に決めつけることはできない。

(3) まとめ

以下、まとめよう。住民の近所づきあいの実体と希望をみると、彼ら／彼女らは総じて浅い付き合いを望み、また、実際の付き合いも立ち話や挨拶程度の軽いものに留まることが明らかになった。しかも、つきあいの濃淡は、本来、住民関係が濃密と考えられた既存地区において薄い。これは、既存地区が、もはや分断された新住民を中心に構成されていることを表している。濃密に結ばれた旧住民は、数としては圧倒的にマイノリティなのである。

次に、ネットワーク項目から、住民が近隣にどの程度のサポート関係を築いているのか探った。ここから、病気や日常の用事、相談において頼ることのできる近隣住民をもつ人は半数にも満たず、多くの人は気晴らしの関係を築いていることがわかった。この点は、“さらっとした”関係を望むとした近所づきあいの希望の分析に合致する。

しかし、気晴らしの関係を築いているといっても、そうした関係をもつの

は住民の半数弱である。つまり、住民の半数は近隣と気晴らしの関係すらもっていないのだ。多くの住民が濃密な近隣関係を望んでいない現状に鑑みると、この結果は仕方ないとも言えよう。質問紙調査で見える限り、地区特性を問わず、地縁を軸に関係を再編するのは極めて困難だといわざるを得ない。

6-2-2 住民のパーソナルネットワーク

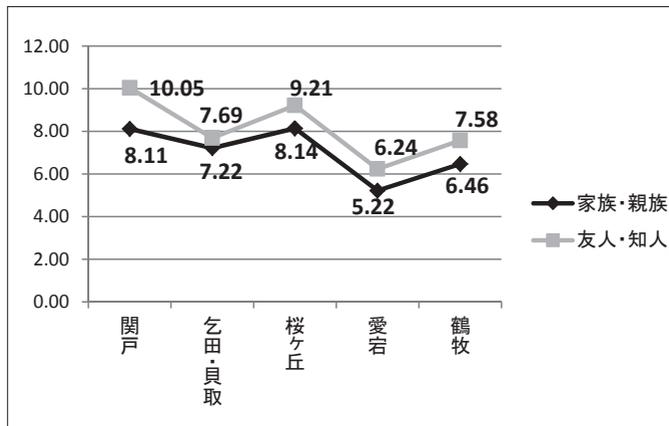
最後に住民の人間関係について、多摩市外の人びとも含めて検討しよう。本調査は問3で、日頃親しく、頼りにしている家族・親族および友人・知人の人数を距離別に尋ねている。距離のカテゴリーは、同居・敷地内、30分未満、30分～1時間未満、1時間～2時間未満、2時間以上である。

多摩市は端から端まで、だいたい30分もあれば移動できる。このような事実を鑑みると、サポートネットワークにおいて30分以上として特定された人は、概ね市外に住むと考えられる。以下では、この質問をもとに住民のサポート関係を検討する。

(1) ネットワークの傾向

まず、住民のネットワークの総数である。図6-14は日頃親しくしている家族・親族および友人・知人として各地区の住民があげた人数の平均値を示している。いずれの地区も家族・親族数よりも友人・知人数のほうが多い。人数に限りのある家族・親族よりも友人・知人のネットワークのほうが大きいことはけっして珍しいことではない。調査地の住民は、親しくしている家族・親族を5～8人でいどもち、友人・知人を6～10人でいもっている。

図 6-14 住民のネットワークサイズ（家族・親族、友人・知人）



それでは次に、地区別の違いを検証しよう。地区別の特性としてまず目につくのが“団地エリア”のネットワークの小ささである。愛宕、鶴牧ともに、相対的にネットワークの平均人数が少ない。この数値だけを見ると、団地の人間関係の希薄さを想起させ、先の分析で見られた、団地エリアにおける近隣の気晴らし関係の知見と矛盾する。

しかしながら、後述するように、近隣の友人関係を見ると、団地エリアは決して少ないわけではない。したがって、この数値が示すのは、多摩市を超えて広域的にネットワークを測定した場合、団地に住む人びとの保有量は相対的に少ないという事実のみである。この結果は、“団地”という居住特性が近隣のみならず、広域的な関係の形成にも寄与している可能性を示唆する。

次に目を惹くのが関戸、桜ヶ丘のネットワークの多さと愛宕の少なさである。これは消費傾向の分析でも見た立地および階層から説明できる。

立地に恵まれた関戸は、近隣のみならず、市外の親戚や友人・知人にもアクセスしやすい。このアクセスの容易さがネットワークの維持にも貢献しているのであろう。階層については、ネットワーク研究では、「階層の高い人びとはネットワークが豊富だ」という知見が従来から支持されている。戸建て住宅の桜ヶ丘の結果は、それに沿ったものと言える。

一方、愛宕の結果は、立地および階層的資源に恵まれない地区の厳しい実情を表している。図を見れば明らかなように、愛宕地区の住民のサポート関係は、他地区に比べ明らかに少ない。第一分冊の知見を踏まえると、愛宕エリアは生活の満足のみならず、ネットワーク形成においても不利な状況にいることになる。

(2) 距離別のネットワーク

次に、住民のネットワークについて距離別に検討してみよう。これにより、多摩市の住民は居住地付近にネットワークを築いているのか、居住地から離れた中長距離の場にネットワークを築いているのか確認する。図 6-15、6-16 は日頃親しくしている家族・親族および友人の距離別人数である。図の中の「近距離」は自宅から 30 分未満のところに住む人の数、「中距離」は 30 分以上 2 時間未満のところに住む人の数、「遠距離」は 2 時間以上離れたところに住む人の数である。

図 6-15 家族・親族ネットワーク(距離別)

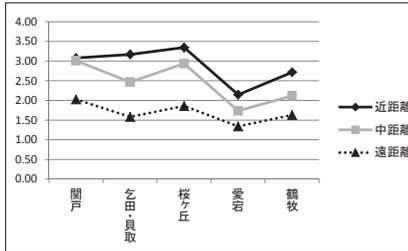
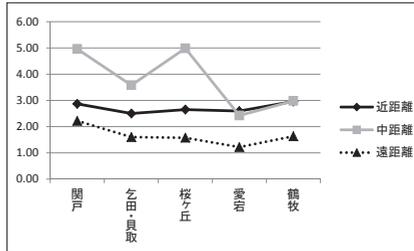


図 6-16 友人・知人ネットワーク(距離別)



まず、家族・親族と友人・知人の分布を比較してみよう。当たり前のことだが、家族・親族は近距離、友人・知人は中距離に住む人が多い。しかし、これはすべての地区に共通して見られる特徴ではない。関戸では近距離と中距離の家族・親族の人数はほぼ同じであり、愛宕と鶴牧では近距離と中距離の友人・知人数はほぼ同じである。ここから、友人関係について、団地の 2 地区はそれほど広域化していないものの、他の 3 地区は市域を越えた関係が

中心だと言える。

以上の点を念頭におきつつ、次に、地区別の特徴を検討しよう。まず、先にあげた団地地区の特徴である。団地の2地区は近距離と中距離の家族・親族ネットワークおよび中距離の友人ネットワークが小さい。このうち家族・親族ネットワークの結果は、団地の住民が核家族として、その他の血縁から切り離された形で多摩市内に入ってきたことを表す。彼ら／彼女らは遠方から流入してきたゆえに、同居家族など限られた親族にしか頼れないのである。

また、先にも述べたように、団地地区の住民は、友人関係も広域化していない。これらの知見を総合すると、団地地区の住民の人間関係は、市域を越えた関係までも含めると、公営、分譲問わず相対的に希薄だと言えよう。しかし、以上の知見から団地の人間関係を“希薄”と結論づけるのはやや早計である。

図6-16に示したように、近距離の友人関係に限ってみれば、団地地区の人間関係は他の地区と比べて決して遜色ない。また、6-2-1の分析で明らかにしたように、団地地区の住民は、他の地区の住民よりも近隣と気晴らしの関係を築いている。これらの結果から、広域的な関係の少ない団地地区の住民にとって、近隣関係の意味合いは決して小さくないと考えられる。彼ら／彼女らは、広域化した関係をもたない分、近隣には相対的に濃い関係を築いているのである。

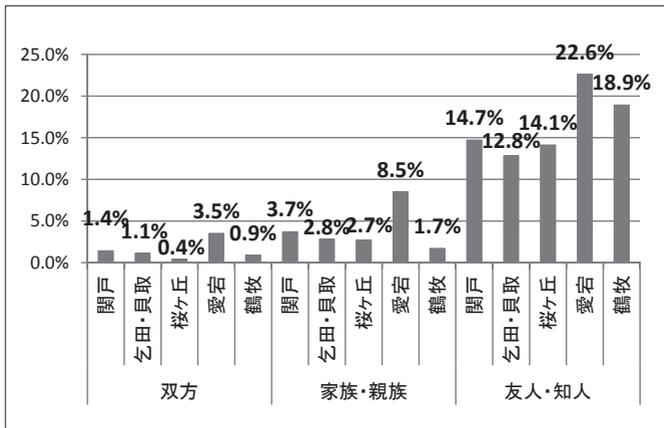
中距離、遠距離の関係でほとんど上位を占める関戸と桜ヶ丘の結果は、これまでたびたび言及してきた立地と階層性から説明できる。すなわち、関戸は交通手段に恵まれているため、桜ヶ丘は階層的資源に恵まれているために、市外に親族および友人関係が拡散しているのである。愛宕の結果はその反対と言ってよい。

最後に混在地区の乞田・貝取である。この地区の数値の大半は、5地区の中間に位置しており、あまり目立った特徴はない。混在地区で立地および階層についても中間的であるため、却って目立った特徴が出なかったのだろう。

(3) ネットワークをもたない人

最後に、日頃から親しくしている家族・親族や友人・知人をもたない人に焦点を当てて分析してみよう。図 6-17 は日頃親しくしている家族・親族、友人・知人、それらの双方について 0 人と答えた人の比率である。

図 6-17 ネットワークをもたない人



まず、親しい家族・親族、友人・知人いずれももたない人、すなわち孤立している人びとを見ると、非常に少ないことがわかる。愛宕の 3.5% を除くと 0.4% ~ 1.5% の範囲に収まる。日本全国の人びとを対象に孤立状況を検討した石田（2011）の分析結果が、5% 程度だったことに鑑みると、孤立状況にある回答者は少ないと言えよう。ただし、石田（2011）のデータは 89 歳の人まで含むため、単純な比較はできない。

地区別の数値を見ると、桜ヶ丘が最も小さく、次いで鶴牧である。鶴牧はネットワークサイズという点では小さかったものの、孤立者が多いわけではない。つまり、最低限のネットワークは確保しているのである。

対照的なのが愛宕である。愛宕は地区のなかで孤立者が最も多い。また、後に確認するように、親しい家族・親族、友人・知人がいない人も最も多い。したがって、愛宕はサポート関係の総量に恵まれないばかりか、最低限度の

関係の確保についても不利な状況にあることがわかる。

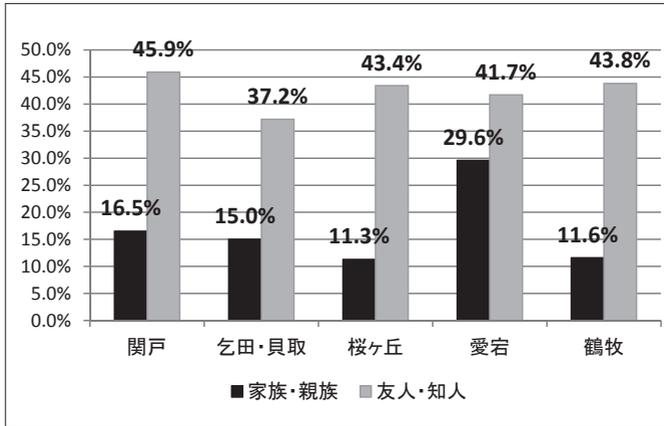
次に、家族・親族と友人・知人について分けて見てみよう。まず、全般的傾向として言えることは、どの地区の人びとも家族・親族を中心に関係を築いているということだ。親しい家族・親族がいない人は愛宕を除くと、最も多くて関戸の3.7%である。一方、友人・知人については、12%から22%の人が親しい関係をもっていない。ここから、人びとの人間関係の中心は未だに家族・親族であることがわかる。それは、新規開拓された住宅地においても変わらない。したがって、家族・親族の衰退は、住民の互助関係を一挙に後退させる可能性がある。

地区として特徴的なのは愛宕と鶴牧である。愛宕は、先に述べたように、家族・親族、友人・知人いずれにおいてもネットワークに恵まれていない。第一分冊の階層条件や意識条件を加味すると、賃貸・公営団地地区の厳しさが浮き彫りになる。

鶴牧は親しくしている家族・親族がいないと答えた人は最も少ない一方で、親しくしている友人・知人がいないと答えた人は愛宕に次いで多い。ここから高階層であるが団地に住む鶴牧の人びとの特徴を推測することができる。すなわち、大半は家族・親族をアテにしつつ、友人・知人関係の分散は大きいのである。

ネットワークの平均値で見ると、鶴牧の近隣関係は他の地区に比べ盛んであった(図6-12)。にもかかわらず親しく頼りにする友人・知人が「いない」と答える人も2割近くにおよぶ。ここから、鶴牧の住民は意識的に地域活動をしている人と分厚い鉄の扉に閉じこもり、地域との関係を断っている人に二分されると考えられる。後者については、高齢化、単身化が進んだときに孤立予備軍となる可能性がある。したがって、今後の動向に注意しなければならない。

図 6-18 近距離に住む親しい家族・親族、友人・知人がいない人



最後に近距離に住む親しい家族・親族、友人・知人をもたない人についても確認しておこう（図 6-18）。

図を見ると愛宕を除く諸地区に住む人の多くは、近隣に親しい家族・親族がいることがわかる。関戸、乞田・貝取と桜ヶ丘、鶴牧の間にある差は単身向けの集合住宅の数によるだろう。すなわち、核家族または二世帯居住用に開かれた住宅地では、同居家族・親族に頼れる可能性が多いのである。

愛宕については、住民の3割が近場に親しい家族・親族をもたない。親しく頼りにできる友人・知人についても「いない」人は4割を超えており、愛宕地区の厳しさが伺える。

ちなみに、親しい友人・知人については、30分以内の距離に「いない」という人が、乞田・貝取を除くといずれも4割を超える。30分以内というのは、多摩市の端から端まで移動できるくらいの時間である。つまり、住民の多くは、多摩市内に親しい友人・知人関係をもたないのだ。先に示したように、住民の多くが“さらっとした”関係を望むという事実を鑑みると、この数値は現状を正確に反映した結果だと言えよう。

(4) まとめ

本調査から住民の人間関係の様相を探ると、地域については、それほど厚みのある関係は存在しないし、そもそも住民もあまり濃い付き合いを望んでいないことが分かる。近隣との関係はサポートというよりもせいぜい気晴らしであり、親密な関係を望む人は5%にも満たなかった。

一方、家族・親族は、多くの人からサポート源として認識されていた。愛宕を除く住民の8割以上は同居または30分以内の場に親しく頼りにできる家族・親族をもっている。ここから郊外の間人間関係は、重層的なサポート役割を担う家族・親族とさらっとした気晴らしの役割を担う近隣関係により構成されていることが分かる。

しかも、近隣にサポートや気晴らしの役割を担う友人・知人関係を保持している人は、せいぜい6割弱であり、決して多いとは言えない。本分析の結果は、これまで都市郊外の特徴としてたびたび指摘されてきた知見を追認している。都市郊外の間人間関係は、強い家族・親族関係と弱い近隣関係により構成されているのである。

地区別の特徴を見ると、立地および階層特性に加え、団地独自の特徴も見られた。立地に恵まれる関戸、階層的資源に恵まれる桜ヶ丘の住民のネットワークは相対的に大きく、また、中距離よりも遠方に拡散していた。この点は、これまでの研究の知見と、そう大きな違いはない。

しかし、多摩センターへのアクセスに恵まれ、階層的にも高い人の多い鶴牧では、立地および階層の強みはあまり見られなかった。それどころか、ネットワークは総じてあまり豊富ではなく、愛宕と近似した傾向を示した。これは、住民の人間関係を規定するにあたり、立地と階層性だけでなく第三の変数、団地が影響していると考えられる。団地の住民は遠方まで関係を広げず、近場の関係で済ませている。これを関係の忌避傾向と捉えるか、近隣の重視傾向ととらえるかは判断の分かれるところである。いずれにしても、興味深い知見である。

さて、立地、階層的資源に恵まれず、団地特性を備えた愛宕は関係においても最も恵まれなかった。サポート関係の総量は少なく、孤立している人も

多い。したがって、愛宕における生活問題を共助により解決するためには、一定以上の行政サポートが求められよう。

7 地域参加と世代間交流

本節では、本調査で得られた数量データを使用して住民の地域参加と世代間交流について検討する。データとしては質問紙調査の間6、間14を用いる。調査票の詳細は巻末付録を参照されたい。

7-1 地域参加

福祉国家政策が後退する中、住民の地域参加への期待がますます高まっている。本節では、本調査で調査対象地となった5地区における地域参加の多寡を比較することで、都市郊外における地域参加の回路を検討したい。

表 7-1 地域別各団体への参加者の割合

	自治会・消防団	P T A など	青年 クラブ ・ 婦人 会 ・ 老人 会	文化 ・ 趣味 ・ スポ ーツ など	福祉 グル ープ	市民 グル ープ ・ N P O 団 体	地 域 の お 祭 り ・ 盆 踊 り	政 治 家 の 後 援 会 な ど	社 会 福 祉 協 議 会
関戸	32.3%	23.5%	30.9%	5.1%	6.0%	38.2%	8.8%	7.8%	
乞田・貝取	30.2%	31.8%	32.4%	5.6%	8.9%	53.6%	12.3%	5.6%	
桜ヶ丘	50.6%	27.8%	43.1%	8.2%	13.3%	56.5%	10.2%	7.5%	
愛宕	61.3%	35.2%	33.7%	11.6%	14.1%	57.3%	8.0%	8.0%	
鶴牧	60.5%	28.3%	44.4%	6.9%	12.4%	57.1%	5.2%	5.6%	
全体	47.6%	29.1%	37.4%	7.5%	11.1%	52.6%	8.8%	6.9%	

表7-1は5地区ごとに地域団体・イベントへの参加している人々の割合を示している^{vi}。ここでは、得られた回答のうち「積極的に参加している(していた)」と「参加している(していた)」を参加者とみなし、その比率を表示した。

個別地域団体・イベントごとにみていきたい。まず「自治会・消防団」への参加については集合住宅層が多い愛宕、鶴牧での参加比率が約60%と全体の比率(47.6%)とくらべて相対的に高いのに対して、関戸、乞田・貝取地区は約30%と逆に相対的にその比率が低いことがわかる。一方で、「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」については他地区にくらべ桜ヶ丘と鶴牧での参加比率が高い傾向にある。このように表7-1から本調査を行った5地区それぞれにおいて住民の地域団体・イベントへの参加の仕方が異なる傾向を示していることがみてとれよう。

どの地区でも「福祉のグループ活動(食事会など)」「政治家の後援会・政党」「社会福祉協議会」への参加比率は低い。その一方で、「地域のお祭り・盆踊り」への参加については(関戸を除いて)過半数を超えており、その割合が高いことがわかる。このことから、地域祭りへの参加は地域住民の地域参加の回路として、最も参入障壁の低いイベントであることが示唆される。

関戸での「地域のお祭り・盆踊り」参加比率は相対的に他地区よりも低い(38.2%)。この低さは駅前で開発が早く、民間資本の流入が激しい関戸地区に特徴のあらわれとみてとれよう。たしかに関戸での「地域のお祭り・盆踊り」参加比率は他地区より相対的に低い割合を示しているものの、関戸における「地域のお祭り・盆踊り」以外の他の地域団体・イベントへの参加比率にくらべれば、38.2%の参加比率は依然として最も高い数値を示している。このことから、他地区にくらべて相対的にその参加比率が低い関戸においても「地域のお祭り・盆踊り」は、他地区同様に、地域住民にとって「参加しやすい地域イベント」であることが示唆される。

「地域のお祭り・盆踊り」住民に地域への参加を促すことを政策的観点から捉えるならば、一過性のイベントになる点は留意する必要がある。しかしながら、地域祭りへの参加比率が他の地域団体・イベントへの参加よりも相

対的に高かったという本項の分析結果は、地域社会への住民（とりわけ新住民）の参入が希求される現代社会において、地域祭りを介した住民参加の回路の充実こそが住民に地域参加を促す効果的な施策である可能性を示唆しているといえよう。

図 7-1 地域団体・イベントへの不参加

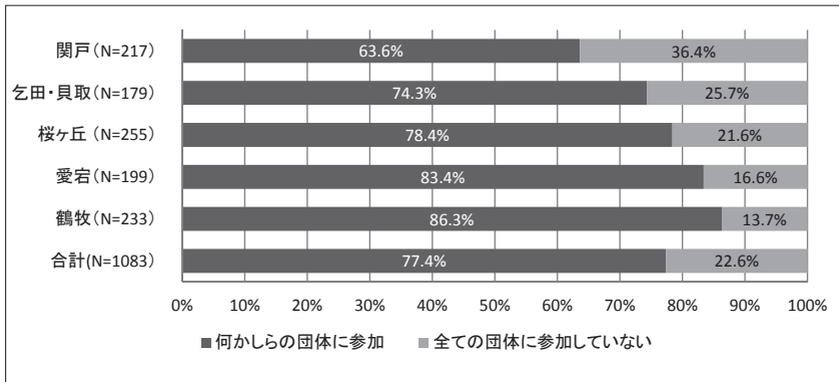


表 7-1 では地域団体・イベントごとにその参加率の多寡をみてきた。次の分析として、地域団体・イベントの内容を問わず、地区における団体・イベントへの参加に地区の差異が存在するのかを検討したい。図 7-1 は地域団体・イベントについて最低でも一つ以上参加している層と、一切の地域団体・イベントに参加していない層を地区ごとに算出した図である。

どの地区でも過半数の人々が何かしらの地域団体・イベントへの参加していることがわかる。その一方で、一切の地域団体・イベントに参加していない層について地区ごとの分散がみられることも明らかとなった。すなわち、愛宕や鶴牧では全ての団体に参加していない割合が約 15% 程度であるのに対して、関戸ではその割合は 36.4% と相対的にも最も高く、次いで乞田・貝取では 25.7% となっており、地区によって地域団体・イベントへの不参加者の割合が異なるのである。以上のように、表 7-1 と図 7-1 から、同じ多摩市でも地域参加の多寡が地区によって大きく異なることが示されたといえよう。換言すれば、少子高齢化をはじめとした人口転換を迎えた多摩市におい

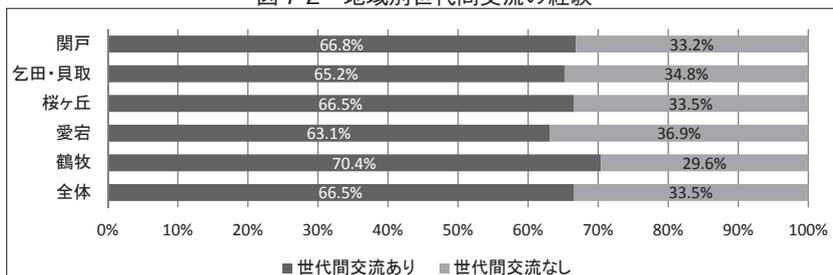
て住民の地域参加を促す政策を検討するにあたっては、こうした地区特性を踏まえた検討が肝要となることが示されたといえよう。

7-2 世代間交流

地域参加と同様、社会的孤立や孤独死といった個人化の負の側面に対する懸念から、近年では自分と異なる世代との交流の促進が希求されている^{vii}。そこで、ここでは、本調査で調査対象地となった5地区における世代間交流の多寡をみていきたい。

図7-2は世代間交流の多寡を地区ごとに算出したグラフである。世代間交流については、調査票問14を使用し指標化した。具体的には年代を単位として自分と異なる世代と交流経験がある場合（「よくある」「たまにある」場合）を「世代間交流あり」とみなし、逆に自分と異なる世代との交流が一切ない場合に「世代間交流なし」とみなした。

図7-2 地域別世代間交流の経験



注) 統計的検定を行ったところ、有意な結果は得られなかった。したがって、地区ごとの世代間交流の多寡に差はみられないことが統計的に明らかとなった。

図7-1にあるようにどの地区でも60%～70%程度の割合で住民が世代間交流を経験していることがわかる。換言すれば、どの地区でも地域での交友関係が自分と同じ年代の人々にとどまる割合が30%～40%程度も存在しているとも指摘できよう。

特にニュータウン開発という行政主導の地域政策が長年にわたって段階的

に進められた多摩市においては、世代間交流の実践は殊更重要な地域課題であると考えられる。なぜならば、多摩市とりわけニュータウン開発地区では、入植の時期や条件から比較的年齢や収入などの点で類似した人々によって地区が形成されていることが想定されており、その結果、地区の構成原理からみて、近い年齢層（や収入層）に偏った地域が形成されやすいことが想定されるためである。このように考えれば、どの地区においても30%～40%程度で存在している世代間交流を行わない層の対処は、ニュータウン開発とともに繁栄を経験した多摩市において地区を問わずに市全体の問題として検討されるべき課題であることを考えられよう。

前項、本項までの分析の結果をまとめておきたい。まず前項の地域参加の多寡については、地区ごとに地域団体・イベントへの参加している人々の割合に違いがみられた。すなわち、集合住宅層が多い愛宕、鶴牧地区では「自治会・消防団」への参加が顕著にみられ、一方、本研究で戸建て地区、分譲団地地区として位置づけられた桜ヶ丘と鶴牧では「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」での参加者の割合が高かった。福祉国家政策が減退する中で住民の地域参加が広く希求される一方で、その地域参加のしやすさは地区ごとに明確に異なるのである。その上で、どの地区でも「地域のお祭り・盆踊り」への参加の高さが顕著に示され、地域祭りへの参加が、地域住民にとって最も参入障壁の低い地域イベントであることが明らかとなった。このことから、地域参加の回路として地域祭りが一定の効果を有していることが指摘された。その一方で、本項の分析結果から、どの地区でも世代間交流を果たさず、年齢的に同質的な住民関係に終始する割合が一定層いることがわかった。

7-3 地域参加と世代間交流の結びつき

本研究の地区ごとにその多寡をみてきた。しかしながら、現実には地域参加も世代間交流も同時的に生じている可能性も考えられる。あるいは、社会的孤立や孤独死といった負の側面への対応という意味で、地域参加や世代間交流が希求されるのであれば、本来的にはその両者が同時に発生している

ことが望ましい地域のあり方とも考えられる。そこで、ここではこれまで個別にみてきた地域参加と世代間交流の関連を捉えることで、都市郊外における地域形成のあり方を検討したい。

表 7-2 は地区別に地域参加（参加なし=0、参加あり=1）と世代間交流経験（世代間交流なし=0、世代間交流あり=1）の関連を示した表である。表中にはΦ（ファイ）係数を示した。Φ係数は-1から+1の値をとり、絶対値が高ければ高いほど関連が強いことを示す。例えば、自治会・消防団への参加について、関戸では世代間交流を経験している場合に自治会・消防団に参加している傾向が0.208と算出され、一方で乞田・貝取における自治会・消防団のΦ係数は0.158と算出されている。乞田・貝取の値（0.158）は関戸での値（0.208）よりも低いことから、関戸における世代間交流と自治会・消防団の結びつきは乞田・貝取でのそれよりも強いことがわかる。また、統計的に有意な結果がみられない（つまり、数値の解釈に明確な意味があるとは考えにくい）場合には、該当箇所を黒く表示した^{viii}。

表 7-2 地区別にみた地域参加と世代間交流経験の関連（Φ係数）

	自治会・消防団	老人会・PTAなど	青年クラブ・婦人会・ツなど	文化・趣味・スポーツなど	福祉グループ	O団体	市民グループ・NP	祭り	政治家の後援会など	社会福祉協議会	有意な項目のみ各地域の平均
関戸	0.208	0.207	0.255					0.263	0.168	0.116	0.203
乞田・貝取	0.158	0.283	0.213			0.213	0.288	0.181			0.223
桜ヶ丘	0.193	0.176	0.235	0.165			0.215				0.197
愛宕	0.22					0.149	0.177	0.132	0.142		0.164
鶴牧		0.193	0.229			0.132	0.250				0.201
合計	0.167	0.186	0.208	0.153	0.13	0.235	0.113	0.1			0.162

自治会・消防団への参加と世代間交流の結びつきについては愛宕が特に高い一方で、鶴牧では統計的に有意な結果はみられなかった。前々項で、集合

住宅が多い愛宕と鶴牧は自治会・消防団への参加が高かったことを指摘したが、世代間交流との結びつきをみた表7-2から、その内実は愛宕と鶴牧で異なることが指摘できる。すなわち、愛宕における自治会・消防団への参加は世代間交流に結びついているものの、鶴牧における自治会・消防団への参加は異なる年齢層の交流には結びつきにくい傾向が示されたのである。

地区別にみてみよう。関戸では「自治会・消防団」「青年クラブ・婦人会・老人会・PTA・子ども会」「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」「地域のお祭り・盆踊り」への参加は世代間交流と結びつきやすい傾向がみられる。漸進開発地区である関戸では比較的幅広い地域参加が世代間交流に結びついていることから、他地区にくらべて相対的に地域参加が効率的に実践されていると考えられる。

乞田・貝取は「青年クラブ・婦人会・老人会・PTA・子ども会」「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」「地域のお祭り・盆踊り」「政治家の後援会・政党」への参加が世代間交流と結びつきやすい傾向がみられる。「青年クラブ・婦人会・老人会・PTA・子ども会」「政治家の後援会・政党」が世代間交流とも結びついている点は既存住民と新住民が混在する乞田・貝取地区の特徴とも考えられよう。

桜ヶ丘は「自治会・消防団」などで程度の世代間交流が実践されているものの、「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」への参加と世代間交流の結びつきが、他の地区と比較して高い。「地域のお祭り・盆踊り」への参加と世代間交流の結びつきもみられるものの、その結びつきの強さは関戸や乞田・貝取ほどではない。むしろ、他地区と比較して桜ヶ丘では「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」での世代間交流が最も実現しやすい傾向が示されているのである。

愛宕は「自治会・消防団」への参加が世代間交流と結びついている一方で、他の地区でみられる「青年クラブ・婦人会・老人会・PTA・子ども会」「文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル」「地域のお祭り・盆踊り」への参加と世代間交流の結びつきが、総じて弱い。愛宕においては、こうした地域参加は世代の異なる人々の関係構築に帰結していないのである。むしろ、愛宕

では地域参加と世代間交流は「自治会・消防団」において最も結びつきやすいと考えられる。

鶴牧は、他地区とくらべて中程度の地域参加と世代間交流の結びつきが示されたといえる。その上で、特に「地域のお祭り・盆踊り」への参加が関戸や乞田・貝取と同様に、世代間交流と顕著に結びついていると判断される。

本節の表7-1から、参入障壁の最も低い地域参加として地域での祭りを指摘した。しかしながら、そうした地域祭りがどの地区でも、世代間交流に結びついているわけではないことが表7-2の分析結果から示されたといえよう。表7-1と表7-2から、以下の点が指摘できる。すなわち、住民参加の政策的観点にたてば、参入障壁の低さから地域での祭りの実施は住民参加について一定の効果が期待できるものの、住民参加の回路としてそうした地域祭りを盲目的に企図するのではなく、各地区特性に根ざした地域参加の回路の検討が肝要なのである。

本節では、世代間交流という点から地域参加の内的多層性を検討したが、このことから、同じ多摩市でも地区によって着目すべき地域参加のあり方が異なることが示されたといえよう。今後、都市郊外においては世代間共生といった地域・地区に偏らない政策課題が噴出すると考えられるが、本節の分析結果はそうした脱地域的な政策課題の解決は、地域特性に根ざして検討されるべき内容であることを指し示していると考えられる。

8 地域への愛着と定住意識

本節では、住民が持っている地域への愛着と定住意識を分析する。分析の流れは、まず第1項で愛着の状況を明らかにした後、愛着と関わりが深い、住民の居住経験との関連を分析する。第2項では定住意識の状況を確認した上で、愛着と定住意識の関連を明らかにする。

なお、ここでいう地域への愛着（Place Attachment）とは、「人々と特定の地域をつなぐ感情的な絆や結びつき」（Hidalgo & Hernández 2001）のことである。この調査では、問10において、①「お住まいの地区周辺」、②「多

摩市」、③「南多摩地域（八王子・日野・町田・多摩・稲城市）^{ix}」、④「東京都」という4地域に対する愛着を、「感じる」「やや感じる」「あまり感じない」「感じない」という4件法で測定している。

8-1 居住地区と地域への愛着

まず、4地域に対する愛着についてみていく。図8-1は4地域に対する愛着を「感じる」と回答した人の比率を居住地区別に示したものである。この調査は「多摩市のまちづくりと福祉にかんする調査」と銘打たれており、〈多摩市のまちづくり〉に関心のない人々は、そもそも調査票を返送していない可能性が高い。つまり、収集したデータでは、居住地区および多摩市に対する愛着は、比較的高い値を示しやすいと考えられる。実際、居住地区への愛着をみると、全体では47.4%の人が愛着を「感じる」と回答しており、「やや感じる」まで含めると、実に9割近くの人が、居住地区への愛着を感じていた。このような理由から、ここでは「感じる」と回答した人の比率にのみ着目する。

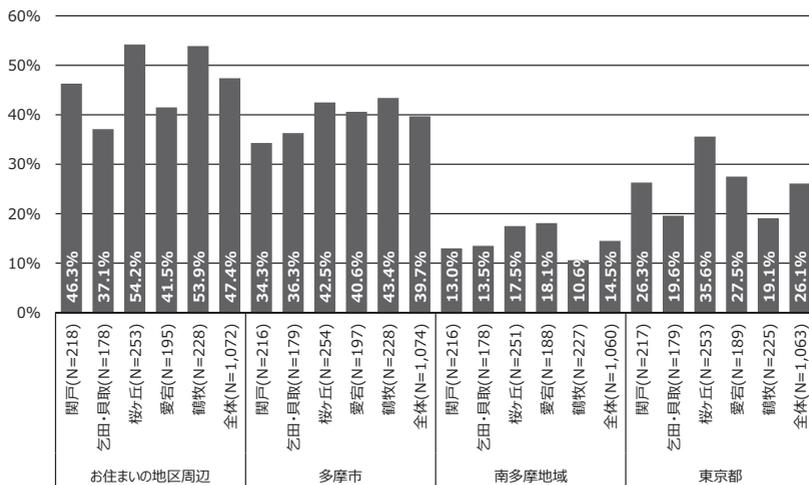
居住地区への愛着を地区別にみると、「感じる」と回答した人の比率は、桜ヶ丘、鶴牧で高い一方、愛宕、乞田・貝取は低くなっている。この傾向は、第4節で示した居住構成（図4-4）の戸建て・分譲比率、第5節の平均世帯年収（図5-4）、および平均生活満足度（図5-12）と相似であることから、居住地区周辺への愛着には、地区特性が強く反映されているものと解釈できる。なお、図表は省略するが、地区と愛着を感じる程度のクロス表のカイ2乗検定の結果は0.1%水準で有意であり、居住地区によって居住地区への愛着は有意に異なることがわかる。

次に、多摩市への愛着をみると、既存地区である関戸、乞田・貝取で、愛着を「感じる」傾向が低い一方、桜ヶ丘、愛宕、鶴牧というNT地区では高い傾向がみられる。これら3地区はNT開発によって地域の宅地開発が進んだエリアであり、こうしたことが影響しているのかも知れない。しかし先程と同様に、クロス表のカイ2乗検定の結果をみると、有意な違いとはいえない。

続いて、南多摩地域への愛着をみると、愛着を「感じる」と回答した人の割合は、どの地区でも低い値で、地区による有意差はみられない。これは、多摩市を含めた旧南多摩郡の群域に対する住民の愛着は希薄であることを示している。

最後に、東京都への愛着をみてみよう。関戸、桜ヶ丘における「感じる」比率の高さは、これは第6節でたびたび示された立地と階層性から解釈できるだろう。すなわち、関戸は交通手段に、桜ヶ丘は階層的資源にそれぞれ恵まれているため、ハレの場の消費を23区で行っており、友人関係も広域に広がっていた。これが東京都全体への愛着へとつながったと考えられる。しかし、桜ヶ丘に次いで高い値を示している愛宕と、最も低い値を示している鶴牧については、立地と階層性では解釈できないため、他の観点から考える必要があるだろう。なお、クロス表のカイ2乗検定の結果は0.1%水準で有意であり、居住地区によって東京都への愛着は有意に異なることがわかる。

図8-1 居住地区と各地域への愛着



8-2 住民の居住経験と地域への愛着

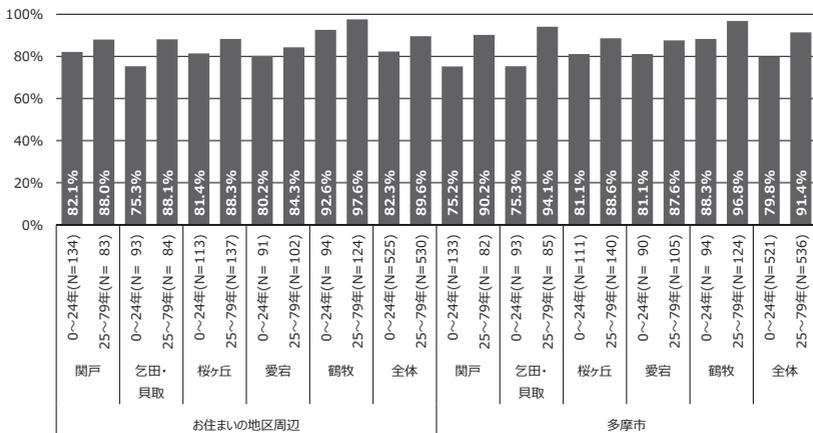
次に、住民のこれまでの居住経験との関連を分析していく。ここでは、居住経験にかんする変数として、多摩市への居住年数（問24B）、居住形態（問26A）、近所づきあい（問1）との関係のみていく。ここでは分析の都合上、愛着は「感じる」と「やや感じる」を「感じる」に、「あまり感じない」と「感じない」を「感じない」にまとめている。なお、居住経験についての変数は、多摩市を含めた近隣の生活について尋ねた変数であるため、ここからは地域への愛着を①「お住まいの地区周辺」と②「多摩市」のみに限定する。

8-2-1 多摩市への居住年数との関連

図8-2は、多摩市への居住年数と居住地区への愛着との関連および、居住年数と多摩市への愛着との関連を示したものである。居住年数については、全体の人数がほぼ均等になるように、25年未満とそれ以上に2区分している。

まず居住地区への愛着をみると、どの地区においても、居住年数の長い人の方が愛着を感じており、乞田・貝取でのみ5%水準で有意差がみられた。

図8-2 居住年数と地域への愛着（地区別）



乞田・貝取で居住年数が長い人々は地主層を含む旧住民層、居住年数が短い人々は新住民層だと解釈できる。旧住民層は、どんど焼きに顕著にみられるような「ムラ」的な関係性を色濃く残しており、こうした関係の資源の有無が愛着の差となって表出したものと解釈できる。

次に、多摩市への愛着をみると、居住地区への愛着同様、居住年数が長い人ほど、愛着を感じる傾向があるものの、より居住年数の影響が強くみられ、関戸、乞田・貝取、鶴牧で有意差がみられた。関戸、乞田・貝取における、居住地区への愛着と多摩市への愛着を比較すると、居住年数が短い人は多摩市よりも居住地区に愛着を感じている人が多い一方、居住年数が長い人は居住地区よりも多摩市に愛着を感じる人が多くなっている。これは、居住年数の短い人々は、居住年数の長い人々ほど、多摩市に対する愛着は持っていないことを示している。

鶴牧については、居住地区に対する愛着と多摩市に対する愛着を比較すると、居住年数が短い人は、多摩市への愛着を持つ人より、居住地区への愛着を感じる人の割合がわずかに多い。鶴牧は第5節で示したように比較的高階層層者が多い。これは鈴木広（1986）が述べた大都市近郊の団地エリアの特徴と合致するが、分譲集合住宅エリアであるという点で異なる。こうしたエリアでは、自分が居住する地区に対する関心は高い一方、鈴木という地元社会、すなわち多摩市全体に対する関心は高くない可能性が示唆される。だが、その差はわずか4.3ポイントであり、その真偽を明らかにするにはより精緻な分析が必要だろう。

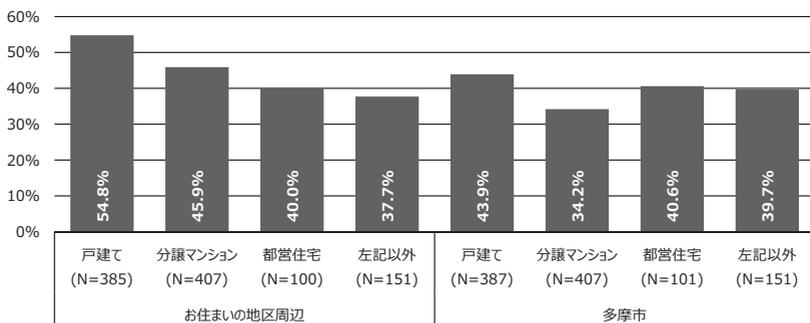
8-2-2 居住形態との関連

ここでは、居住形態による地区に対する愛着の差違をみていく。第2節で述べたように、地区によって開発の経緯が全く異なるため、都営住宅がない地区もあれば、大部分が分譲住宅で占められている地区もある。そのため、ここでは地区別の分析は行わず、「戸建て」「分譲マンション」「都営住宅」「それ以外」の4つの居住形態についての比較を行う。なお、「それ以外」の大部分は民間の賃貸住宅が占めている。

図 8-3 は居住形態と居住地区への愛着および、居住形態と多摩市への愛着との関連を示したものである。まず、居住形態と居住地区への愛着をみると、「戸建て」、「分譲」、「都営」、「それ以外」の順で、居住地区への愛着を「感じる」人が少なくなっていることがわかる。「それ以外」の多くは、民間の賃貸住宅であり、転居をする可能性が高いため、居住地区に対する愛着を抱く人が少ないと解釈できる。

以上の結果を多摩市への愛着と比較すると、戸建て、分譲マンションの場合、居住地区への愛着より多摩市への愛着を「感じる」人の割合が少なくなっている。戸建てや分譲マンションの場合、近隣の環境などについて検討をよく重ねた上でこれらを取得するか、血縁関係によって取得する可能性が高いと考えられるため、居住地区への愛着の方が多摩市への愛着より高いと解釈できる。一方、分譲マンション居住者の多摩市に対する愛着に着目すると、4つの居住形態の中で最も低い値になっている。これは、よくいわれるように、分譲マンション居住者の近隣関係は、管理組合への参加などにとどまり、地域の自治会への参加は低調であるということから解釈できよう。一方、都営住宅、それ以外の人々の多摩市への愛着は、地区への愛着とほぼ同じかわずかに高い。

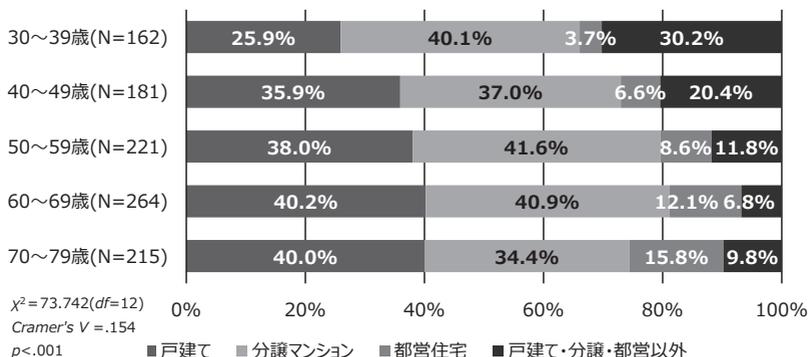
図 8-3 居住形態と地域への愛着（地区別）



さて、以上の分析から、戸建て・分譲・都営以外の住居（多くは民間の賃貸住宅）に住む人々は、居住地区に対しても、多摩市に対しても希薄な愛着

しか抱いていないことが判明した。この結果を解釈するために、最も基本的な属性要因のひとつである年齢と居住形態との関連をみてみよう。図8-4をみると、若い人ほど戸建て・分譲・都営以外の住居に住む傾向がうかがえる。三浦展（1995）は、団塊ジュニア世代を地域性や歴史性を持たない「予め故郷を喪失した世代」、「生来の『根無し草』』と呼んでいる。もしそうであるならば、団塊ジュニア世代が含まれる30～40代が居住地区に対して抱く愛着は、他の年齢よりも低いことが予想される。しかし、今回のデータを用いて年齢と居住地区に対する愛着との関係を分析したところ、図表は省略するが、有意な差異はみられなかった。これらの結果を総合すると、年齢ではなく、居住形態が地域社会に対する感情を決定づける要因になっているといえよう。三浦は「郊外に住む人々は、偶然隣りあわせて暮らしているだけである。何年かすればまた、どこか他の土地へ引っ越していくかもしれない。」（三浦1999: 164）と述べている。しかし、このような指摘は郊外全体にあてはまるのではなく、あくまで民間の賃貸住宅に住む人々についてのみあてはまるものといえるだろう。

図8-4 年齢と居住形態



8-2-3 近所づきあいとの関連

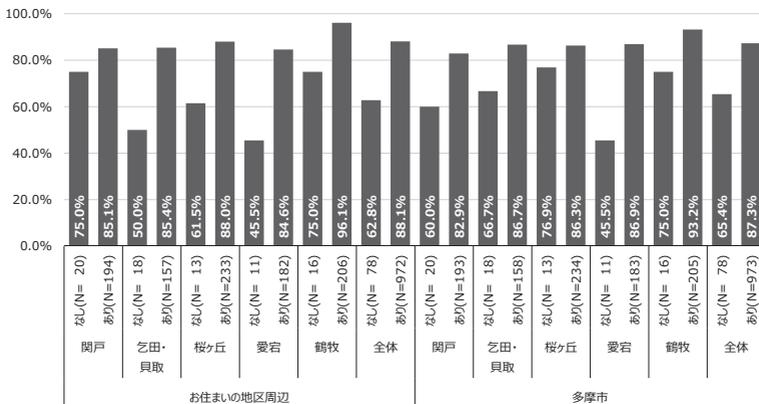
ここでは、近所づきあいによる愛着の差をみていく。第6節において、

地区による近所づきあいの差を概観したが、ここでは大括りに「あいさつする程度」「立ち話をする程度」「お互いに訪問しあう」をまとめたつきあい「あり」と、つきあい「なし」とに分け、地区別に分析を行う。

図8-5は、近所づきあいと居住地区への愛着および、近所づきあいと多摩市への愛着との関連を示したものである。まず、近所づきあいの有無と居住地区への愛着との関連をみると、近所づきあいがある人ほど、居住地区に愛着を抱いている傾向が強いことがわかる。しかし、関戸では近所づきあいの差による有意な違いがない。これは、関戸の住民層によると考えられる。既存地区である関戸には、旧住民も住んでいるものの、民間資本による賃貸・分譲集合住宅に住む人々が多い。第6節で言及したように、こうした新住民の近所づきあいは確かに希薄である。しかし、駅前という利便性の高さがあるがゆえに、近所づきあいがなくとも地域への愛着は75.0%と高く、近所づきあいの有無による愛着の差に有意な差異はみられないと解釈できる。

次に、近所づきあいの有無と、多摩市への愛着との関連をみると、近所づきあいのない関戸の人々の多摩市に対する愛着は、地区への愛着より大きく低下（-15.0ポイント）していることがわかる。彼ら／彼女らは、やはり関

図 8-5 近所づきあいと地域への愛着（地区別）



戸の利便性が享受できればよいのであって、多摩市への愛着は薄いのである。一方、同じ既存地区である乞田・貝取の近所づきあいのない人々に着目すると、多摩市への愛着の方が地区への愛着より高い（+16.7ポイント）ことがわかる。これは、乞田・貝取の近所づきあいのない人々は、近所づきあいという最もローカルな社会関係に十分に包摂されていないことを意味する。この点では、愛宕の近所づきあいのない人々の状況はより厳しい状況にある。彼ら／彼女らは、近所づきあいを行っておらず、地区に対しても、多摩市に対しても愛着を抱くことができていないという点で、感情的に地域から断絶されているといえるだろう。愛宕は立地および階層的資源に恵まれない地区であり、高齢化、単身化が進行中であるため、感情的に地域から断絶された彼ら／彼女らは、地域内の関係的にも孤立しやすいといえる。その存在には十分以上に目を配るべきであろう。

8-3 愛着と定住意識

8-3-1 定住意識を持つ理由

ここからは定住意識についての分析を行う。定住意識は、これからもその場所に住み続けたいという意識であり、この調査では「これからもいま住んでいるところに住み続ける予定ですか」（問11）に対し、「住み続ける予定だ」を選択した人々を定住意識がある人として扱う。

表8-1は、居住地区別に、定住意識を持つ住民の割合を示したものである。これをみると、全体で9割近い人々が定住意識を持っており、地域によって有意な差はみられない。

表8-1 定住意識を持つ住民の比率（地区別）

地区	関戸 (N=218)	乞田・貝取 (N=178)	桜ヶ丘 (N=256)	愛宕 (N=197)	鶴牧 (N=228)	全体 (N=1076)
%	86.7	86.5	86.3	88.8	91.2	87.9

表8-2は定住意識を持つ理由（複数回答可）の選択率を居住地区別に示し

たものである。これをみると、各地区に住む人々が、どのような理由からその地域に定住意識を抱いているか、別の表現をすれば、各地区の魅力を住民がどうとらえているかを把握できる。

「職場や学校が近い」については、関戸、乞田・貝取の選択率が高くなっている。関戸は駅前という交通のアクセスの良さがこの値を押し上げたと考えられる。乞田・貝取については解釈が難しいが、多摩ニュータウン道路という幹線道路に近いことや、多摩センターおよび永山駅に比較的近いこと、地区児童の通学先として指定されている多摩第三小学校へのアクセスの良さがこの値を高めた可能性が推測される。

「福祉や病院が充実している」は関戸、桜ヶ丘の値が低くなっているが、これは必ずしもその地区において福祉サービスや医療が充実していないことを意味しない。確かに桜ヶ丘には病院は少ないものの、そこからバスで10分ほどの関戸には、駅前という立地を生かして多くの病院が存在している。むしろ、この値の高さは、福祉や医療的なニーズの高い住民がそこに居住していることを示していると考えられる。

表 8-2 定住意識を持つ理由の選択率 (地区別)

	職場・学校	福祉や病院	町の雰囲気	教育環境	生活に便利	家の間取り	友人・知人	家族や親戚	住み慣れた場所	お金がない	引越す	引越す手間
関戸	23.3%	9.0%	41.8%	5.8%	74.6%	13.2%	32.8%	40.2%	54.0%	18.5%	13.2%	
乞田・貝取	27.9%	16.2%	34.4%	6.5%	51.3%	14.9%	36.4%	42.2%	61.4%	19.0%	22.7%	
桜ヶ丘	12.7%	10.9%	48.9%	7.2%	39.8%	23.1%	27.6%	40.3%	62.4%	12.2%	12.2%	
愛宕	17.1%	24.6%	32.0%	4.6%	46.9%	15.4%	30.3%	20.0%	71.8%	31.4%	19.4%	
鶴牧	17.8%	21.6%	59.6%	17.3%	60.1%	27.4%	38.0%	35.6%	66.3%	16.8%	15.4%	
全体	19.2%	16.3%	44.4%	8.6%	54.4%	19.3%	32.8%	35.8%	63.2%	19.1%	16.2%	
有意水準	**	***	***	***	***	***	n.s.	***	**	***	*	
Cramer's V	.132	.164	.203	.169	.246	.141	—	.163	.120	.162	.103	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「町の雰囲気がよい」については、鶴牧、桜ヶ丘の値が高い一方、愛宕、乞田・貝取の値が低くなっている。鶴牧はテーマ型の公営分譲団地が林立しており、桜ヶ丘は高級住宅街として知られている。このような町の雰囲気は肯定的にとらえられる一方、民間の賃貸住宅が多く立ち並び、幹線道路沿いの商業施設以外の商業施設に乏しい乞田・貝取、老朽化したエレベータのない「箱型住宅」が林立する雰囲気は否定的にとらえられていることがわかる。

「教育環境がよい」については鶴牧が突出して高い。鶴牧には比較的高階層の人々が多く居住しているだけでなく、子育て世代も多く居住している。そのため、こうした人々のニーズと合致した学校や図書館、公園などの公共施設が充実していることや、恵泉女学園大学や大妻女子大学といった大学が比較的近いことが定住意識につながったものと解釈できるだろう。

「生活に便利」および、「家の間取り」については、これまでも何度も指摘してきた、立地および居住形態によって解釈できる結果となっている。

「家族や親族がいる」については、愛宕が突出して低い。これは第6節で明らかになった愛宕に住む人は家族・親族ネットワークに恵まれていないという点と整合的である。

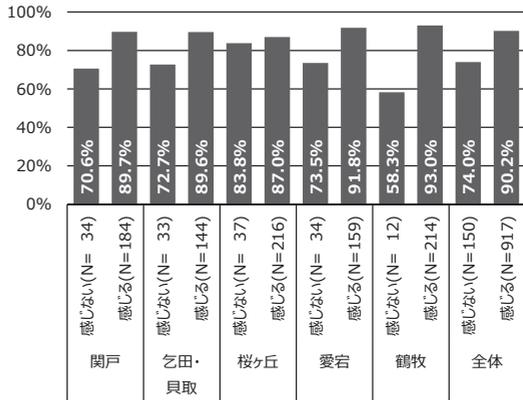
「住み慣れた場所だから」については、関戸で突出して低い。確かに旧住民も多い地区であるものの、それ以上に新住民が多いエリアであり、彼ら／彼女らは、その立地を好んでここに居住している。このことが値を押し下げたのだろう。

さて、最後の「引っ越すお金がない」と「引っ越す手間がかかる」というのは非常にネガティブな定住意識である。なぜなら、「お金」や「手間」の問題が解決しさえすれば、これを選択した人々は、他の地域に転出する可能性がみだせるからだ。「お金」については愛宕の値が突出して高く、「手間」については乞田・貝取、愛宕の値が比較的高くなっている。愛宕は、都営住宅が林立する地区であり、お金の問題が解決したら、あまり居住したくないと考えている人々が多い様子がうかがえる。戦後の文化的な生活の象徴であった郊外団地というイメージは、もはや過去のものであるといわざるを得ない。

8-3-2 愛着と定住意識との関連

図 8-6 は、居住地区別に、居住地域への愛着の有無による、定住意識の有無の差違を示したものである。これを見ると、居住地区に対する愛着のある人の方が、定住意識を抱えていることがわかる。しかし、桜ヶ丘においてのみ、有意な違いが

図 8-6 居住地域への愛着と定住意識の関連（地区別）



みられなかった。これは、桜ヶ丘に愛着を感じる人も感じない人も、桜ヶ丘に住み続けたいと感じているということである。

その理由について、ここでは定住意識を持つ理由の「その他」に対する自由記述回答を地区別に示した表 8-3 に基づいて考察を加えたい。「その他」の選択数および選択率については居住地区による有意差はみいだせなかったが、桜ヶ丘で最も高くなっている。その自由記述回答をみてみると、土地や家屋があることや、そこが実家であること、あるいは相続した家であるなど、「土地・家屋」に関係する理由が多いことが読み取れる。特に、愛着を感じない人についてみると、定住意識の理由として「土地・家屋」に関係するものを挙げている人が最も多い（6人）。つまり、愛着がなくとも、土地・家屋があるため、定住意識が高くなっているといえるだろう。

確かに同様の傾向は既存地区である関戸、乞田・貝取でもみられるが、桜ヶ丘では単に「土地・家屋」があるだけでなく、それが「実家」であることや「相続」、「親と同居する家である」といった理由によるものもみられた。ここからは、桜ヶ丘では土地や住宅が次世代に継承されている様子が伺える。その一方、「土地・家屋」の中身についてみていくと、桜ヶ丘に土地や家屋を購入し、新たに移り住んできたとする回答もみられる。

表 8-3 定住意識をもつ理由「その他」の選択数とその理由（地区別）

地区	その他		自由記述内容の要約
	選択数	選択率	
関戸	15	7.9%	家屋・土地（4）、先祖代々（2）、自然・環境（1）、施設関係（駅、保育園、ピューロランド：各1）
乞田・貝取	10	6.5%	家屋・土地（4）、生まれ育った場所（2）、自然・環境（1）、職場に近い（1）、施設関係（スポーツクラブ：1）
桜ヶ丘	23	10.4%	土地・家屋（7）、実家（3）、相続した家（1）、親と同居（1）、自然・環境（5）、施設関係（学校、獣医：各1）
愛宕	9	5.1%	病院（2）、家賃が安い（1）、都営住宅だから（1）、自然・環境（1）、近所づきあい（1）、年齢（1）、
鶴牧	9	4.3%	自然・環境（5）、道路が広い（2）、土地・家屋（1）、施設関係（駅、公園：各2）、年齢（1）

注：自由記述回答欄に複数の内容が記載されている場合や、具体的な内容が書かれていない場合があるため、その他の選択数と主な記述内容の数は同じにならない場合がある

桜ヶ丘は、確かに高階層の人が多く居住しているという点では、均質的な社会的属性を持つてはいるが、流入時期を考えると、①開発された頃から居住する人々、②開発された頃から居住している住民の子孫、③新しく移り住んだ人々という3タイプの住民が存在していることになろう。当然、彼ら／彼女らの地域生活におけるニーズには違いがあるだろう。本分析では、どのような差異があるのかは明らかにできていないが、桜ヶ丘の地域づくりにおいては、こうした点に配慮することが必要になると思われる。

8-4 本節のまとめ

本節では住民が持つ地域への愛着の状況と、住民の居住経験との関連を分析した後、愛着と定住意識の関連を明らかにした。その結果、居住地区に対する愛着と定住意識の感じ方には、居住地区による差異がみられた。さらに、居住地区に対する愛着については、居住年数が長い人、持ち家の人、近所づきあいがある人が愛着を抱きやすいことも明らかとなった。このことは、近隣の人間関係を盛んにすることによって、人々の地域に対する愛着は増すことを示唆している。

しかしながら、第6節で明らかになったように、人々は“さらっとした”関係を望んでいる。そのため、近所づきあいなど、近隣関係の増加を図るような取り組みは奏功しない可能性が高い。しかも、居住地区に愛着を抱けるか否かは、居住地区によって大きな差異があり、定住意識を抱く理由についても、居住地区による差異が大きかった。つまり、地区特性の違いは、居住地区に対する感情的な側面に対しても、大きな影響を及ぼしているのである。

地域への愛着は、地域活動に対する参加にも影響することが知られている。確かに、地域への愛着は、近隣の人間関係によって増やすことは不可能ではない。しかし、その前提となる地域特性自体に差があり、愛着を抱きやすい地区と抱きにくい地区があるのであれば、愛着を抱きにくい地区に対して、行政が積極的な介入を行わない限り、地域づくりを担う住民の負担は大きなものになるだろう。これまで地域活動を担ってきた人々の高齢化と、その次世代への継承が大きな地域的課題になっている今だからこそ、行政のはたらきかけのあり方は、地域づくりを行う上での大きな鍵となるだろう。

9 ニュータウン評価と政治意識・態度

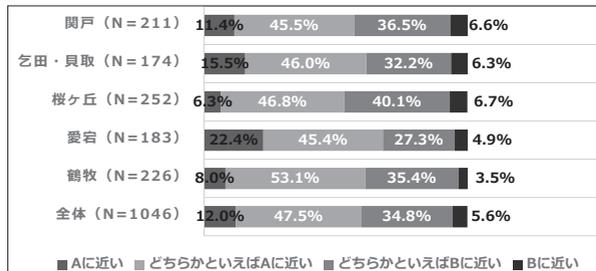
9-1 ニュータウン評価

9-1-1 多摩市への恩恵

本調査では、「ニュータウン開発は、市に大きな利益をもたらした」(問9A)という評価を「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法で測定した。

図9-1のように、全体として、28%が「そう思う」、48%が「ややそう思う」となり、肯定的意見が76%を

図9-1 ニュータウン開発は、市に大きな利益をもたらした



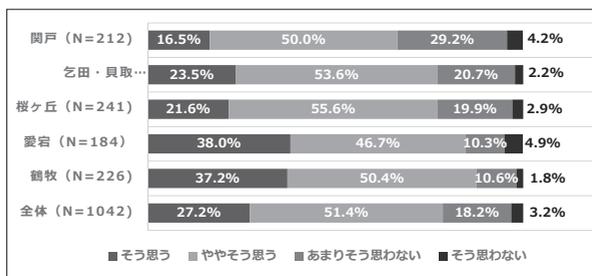
占めている。どの地区でも、概ねニュータウン開発は市に恩恵をもたらしたと考えられているようだ。

地区の差異を見ると、「そう思う」割合は、愛宕と鶴牧が最も高く35%。次いで、乞田・貝取が27%、桜が丘が24%となっている。評価が最も低いのは、関戸の22%である。「一括開発地区」のなかでも、愛宕や鶴牧のような団地は、「ニュータウン開発が多摩市に大きな利益をもたらした」と考えている。一方、ニュータウン開発以前に開発された「戸建て地区」の桜が丘のニュータウン評価は厳しい。また、既存地区の関戸（漸進開発地区）や乞田・貝取（混在地区）も、相対的に評価が厳しくなっている。じっさい、ヒアリング調査でも、関戸にはコミュニティセンターが造られないという声もあった。このように、関戸、乞田・貝取、桜が丘は、直接ニュータウン開発の恩恵を受けていないため、厳しい評価となっている可能性がある。

9-1-2 地元への恩恵

次に、「ニュータウン開発は、全体としてみた場合、地元にとってよかった」（問9B）という開発評価を見てみよう。こちらは、多摩市という自治体の区切りではなく、よりローカルな区域に対する開発の影響についての評価である。

図9-2 ニュータウン開発は、全体としてみた場合、地元にとってよかった



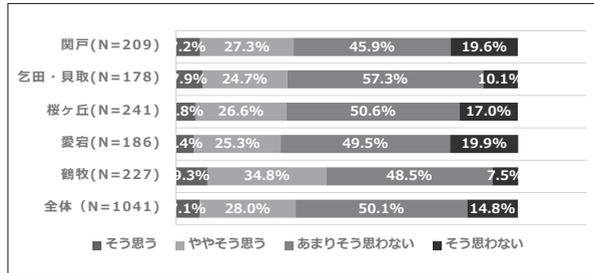
「市への恩恵」同様、全体として、78%が肯定的な評価をしている（図9-2）。なかでも、愛宕や鶴牧といったニュータウン区域の住民の35%以上が「そう思う」と答えている。一方で、既存地区の乞田・貝取や関戸は、桜が丘の評価はそれほど高くない。特に、漸進開発地区の関戸では、「そう思う」が17%と低評価が目立つ。ここでもやはり、ニュータウン区域内より区域

外住民には、「地元への恩恵」は少ないと映っている。

9-1-3 今後の活性化

これまでニュータウン開発に対する評価を見てきた。いわば、これらはニュータウン開発が「良かった」「悪かった」という「過去」への評価である。そこでは、ニュータウン内外ではばらつきがあった

図 9-3 ニュータウンのある多摩市は今後も活性化してゆく



ものの、7割から9割近くの住民が肯定的な評価をしていた。

しかし、「ニュータウンのある多摩市は今後も活性化してゆく」(問 9C)という「未来」の評価については、各地区で肯定的な意見が激減する。「そう思う」「ややそう思う」と肯定的に答えた住民は、5地区全体で35%にすぎないのだ。ニュータウン開発の肯定的評価が8割近くだった鶴牧でさえ、「そう思う」と回答したのは9%、「ややそう思う」が35%である。同じく開発評価の高かった愛宕では、「そう思う」が5%、「ややそう思う」が25%とさらに落ち込む。一方、ニュータウン区域外の関戸、乞田・貝取、桜が丘は、肯定的な意見が3割前後であり、否定的な意見が7割前後を占める。

「後発ニュータウン開発地区」である鶴牧では、肯定的な意見が他に比べて多いものの、全体的として「ニュータウンのある多摩市の今後の活性化」には悲観的であることが分かる。たしかに、多摩ニュータウン開発は2005年に新住宅市街地開発事業を終了している。マスメディアでも、多摩市は「オールドタウン」と揶揄されている。図 9-1・9-2 でみたように、ニュータウン開発の「過去」の評価は決して低くないが、「ニュータウン都市」としての多摩市の住民の展望は決して明るくない。住民のニュータウン開発に対する「肯定的評価」と「危機意識」というジレンマを浮き彫りにしている。

9-2 政治意識・態度

前節で見たように、多摩市住民の意識には、過去のニュータウンへの高い評価、将来の悲観といった乖離があることが分かった。また、ニュータウン区域内外での評価の違いも見出された。ニュータウン開発政策は、公共住宅の供給やコミュニティセンターの拡充といった福祉政策の傾向が強い。ただし、ニュータウンによる多摩市の「今後の活性化」に不安があるのであれば、多摩市住民は、新たな福祉政策を求めていくのだろうか。それとも、政策に頼らず、自己責任社会を目指そうとしているのだろうか。各地域の政治意識・態度（問16）を見ていこう。

9-2-1 問題解決は住民か、行政か

まず、「地域問題の解決は、住民がじぶんたちの力で解決すべきだ」（A）という意見と、「地域の問題は、行政が責任をもって解決すべきだ」（B）という意見の分布を見てみよう。いずれかに近いかを4件法で選択してもらった。

全体としては、住民解決・行政解決は半々である。「住民解決」を志向する者が多い地域は、愛宕（57%）、鶴牧（56%）のようなニュータウン開発地区である。一方、既存の混在地区である乞田・貝取は「行政志向」が多い（58%）。

愛宕・鶴牧のようなニュータウン団地は「住民解決」志向が強いようだ。これは、団地自治会など地縁組織が、未だに機能していることの表れだろうか。乞田・貝取は、凝集性が高そうな既存地域でありながら、来住層も多いため、なかなか住民の連帯がしづらく、行政志向に偏っている可能性がある。

9-2-2 福祉社会か、自己責任社会か

では、各地域では、どのような「社会」が目指されているのだろうか。「生活に困っている人たちに手厚く福祉を提供する社会をめざすべきだ」（A）といった福祉社会か。「自分のことは自分で面倒をみるように、個人が責任をもつ社会をめざすべきだ」（B）といった個人主義社会か。図9-5のように、全体では、半々に分かれている。「自己責任」ではなく、「福祉」志向寄りの地域は、乞田・貝取（58%）、愛宕（59%）、鶴牧（57%）である。半々なの

は、桜が丘である。他に比べて、住民の階層が高い桜が丘は「自己責任」を好む傾向がある。

図 9-4 地域の問題の解決は住民か、行政か

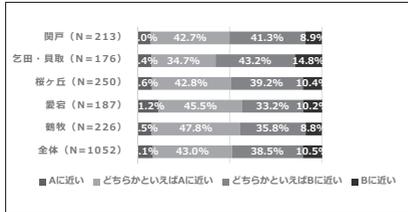
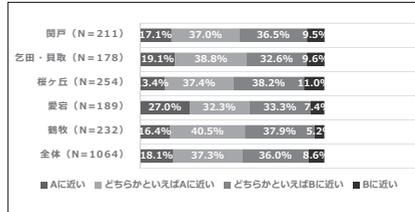


図 9-5 福祉を手厚くすべきか、自己責任か



9-2-3 所得平等か、所得格差か

図 9-6 の「所得をもっと平等にすべきだ」(A)、「個人の努力を促すため所得格差をもっとつけるべきだ」(B) はどうだろうか。全体の 60% が「平等にすべき」と答えている。なかでも「平等にすべき」が多いのは、愛宕(67%)である。一方、「格差をつけるべき」が相対的に多いのは桜が丘(47%)である。これは、多摩市内の所得格差が、そのまま意識に反映される結果となり、住民階層が高いと格差志向、階層が低いと平等志向となっている。

図 9-7 「競争は、社会の活力や勤勉のもとになる」(A)、「競争は、格差を拡大させるなど、問題のほうが多い」(B) という競争に関する態度はどうか。全体の 78% が「競争は社会の活力や勤勉のもと」という競争主義に立っている。特に、競争志向が強いのが、階層の高い桜が丘(82%)である。一方で、「競争は格差拡大」を生むという意見が 31% と若干多いのは、階層が高いとは言えない愛宕である。

図9-6 所得を平等にすべきか、努力を促すため格差をつけるべきか

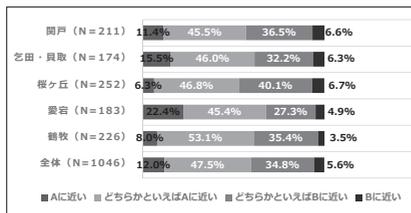


図9-7 競争は社会の活力や勤勉のもとか、格差拡大などの問題か

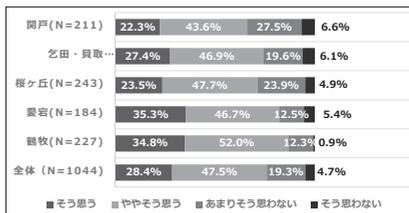


図9-6、9-7をおおまかに見ると、愛宕は平等主義、桜が丘は競争主義である。「ニュータウン」というのは、本来「平等主義」的なものだった。特に初期は、多様な階層に住宅を割り当てる政策であった。そのために、分譲住宅、賃貸住宅、都営住宅といった「ミックス・ディベロップメント」の思想があった(竹中1998)。

このような初期ニュータウン開発の象徴であり、相対的に階層が低い都営団地が多い愛宕は、「平等主義」を求めていると解釈される。しかし、1974年の「行財政要綱」以来、多摩市は住民のミドルクラス化を図ってきた。後期に開発された鶴牧では、高階層が集住しているため、「競争主義」の傾向が強いのではないか。じっさい、鶴牧・桜が丘は「戸建て・分譲」である持ち家層が9割を占める。愛宕は「戸建て・分譲」は4割弱であり、都営住宅が46.2%である。愛宕は相対的に階層が低いため、「競争」から距離を取っている。

これらの地区ごとの価値観の違いについて、「どちらが妥当か」などは、決して言えることではない。重要なことは、同じ多摩市域でも、地区ごとにこれだけの価値観や意識の差があるということである。一口に、多摩市や多摩ニュータウンといっても、このような地区が混在している。したがって、これらの地域差を踏まえ、市政は政策を執行し、住民は活動をしていく必要がある。

9-3 まとめ

図 9-3 で見たように、「ニュータウンのある多摩市は今後も活性化していく」という意見は、全体の3割にすぎない。多くの住民は、ニュータウン都市・多摩市の今後を楽観視はしていない。ならば、彼らは、多摩市から転居していくのだろうか。いや、そうではない。表 8-1、表 8-2 で見たように、どの地区でも、定住意識は極めて高い。持ち家層が多い鶴牧・桜が丘のような「町の雰囲気が良い」といったような「ポジティブな定住理由」もあるし、都営住宅が多い愛宕のように「引越すお金がない」といった「ネガティブな定住意識」もある。「活性化していく」とは思っていないのに、彼らは、多摩市に住み続けるという選択をしている。かつてのニュータウン政策のような恩恵は得られないことを自覚しながらである。

新住宅市街地開発事業は終焉しても、今後の活性化を憂いながらも、多摩ニュータウンに住み続ける（住み続けなければならない）人たち。彼ら／彼女らはいかなる生き残り戦略をとっているのだろうか。

10 おわりに

本論は、多摩市における質問紙調査の結果をもとに、郊外開発が地域に及ぼす影響を与えてきたのか多方面から分析した。その分析の多くは地域間の度数分布の比較や平均値の比較など単純なものに留まる。しかしながら、その単純な分析からも、開発類型ごとの地域の違いは明確に現れていた。人びとが築くつながり、地域参加、地域への愛着や定住志向、ニュータウンへの評価や政治意識などは、それぞれに異なっていた。その詳細については、各節を参照していただくとして、ここではその含意について述べておこう。

第一節でも述べたように、これまで郊外は一面的・画一的なもののみなされがちであった。しかし、行政あるいは民間事業者による“計画的”開発は、その“計画性”ゆえに、各所に特性の異なる郊外を生み出した。それゆえ、彼らは異なった政治意識を抱き（9 節）、また、異なった地域参加をしている（7 節）。“地元”と東京都心部との関わりもそれぞれに異なる（6 節）。

しかしながら、そんな彼ら／彼女らも住んでいる地域に愛着を持ち、定住願望を抱いていることは共通している（8節）。“さらっとした”地域関係を望み（6節）、ニュータウンの行く末に暗澹たる気持ちを抱きつつ（9節）もである。それと同時に、それぞれの地区は、今後、さらなる高齢化を経験してゆくことはほぼ間違いない。

つまり、多摩市に住む人びとは、まちの衰退、高齢化という問題と地域への愛着、定住願望といった地区意識を共有しつつも、その問題への対処法、願望の実現方法については、異なった処方箋を頭に描いているのである。これは、多摩市に限らず、モザイク型に開発された郊外自治体住民に共通して見られる特徴であろう。

自治体の講じる策は、平等原則が優先されるため、地区の平均をとったものになりやすい。しかし、モザイク型の類型を有する自治体において、平均的な策はあまり効果をなさない。というのも、地区ごとの分散が大きいと、平均的な策は、どの地区から見ても「かゆいところに手が届かない」策になりがちだからだ。そうすると、いきおい、住民自身による自助が期待される。

そのさい重要なのが、他地区の成功事例を盲目的に取り入れるのではなく、自らの地区特性を理解し、それにあった方策を施すことである。本論で用いた類型および行った分析は、まだまだ洗練の余地があるものの、今後の地域施策検討の第一歩となるものである。これらの分析を通じて、郊外社会の実態解明および政策検討が活発になることを期待したい。

（執筆分担：6・10＝石田、7＝大槻、8＝井上、9＝林）

謝辞

調査に御協力くださった多摩市の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本調査は大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクトの助成金をもとに行われました。記して謝意を申し上げます。

参考文献一覧

- Hidalgo, M. C. and B. Hernández, 2001, "Place attachment: Conceptual and empirical questions", *Journal of environmental psychology*, 21: 273-81.
- 細野助博・中庭光彦編, 2010, 『オーラル・ヒストリー 多摩ニュータウン』中央大学出版部.
- 石田光規, 2011, 『孤立の社会学——無縁社会の処方箋』勁草書房.
- 石田光規, 2015, 『つながりづくりの隘路——地域社会は再生するのか』勁草書房.
- 三浦展, 1995, 『『家族と郊外』の社会学——『第四山の手』型ライフスタイルの研究』PHP 研究所.
- 三浦展, 1999, 『『家族』と「幸福」の戦後史——郊外の夢と現実』講談社.
- 内閣府, 2013, 「平成 24 年度国民生活に関する世論調査」
(<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-life/index.html>).
- 大槻茂実, 2014, 「NPO/ ボランティア団体の連携についての考察 - プール代数分析によるアプローチ」『日本都市社会学会年報』32: 99-114.
- 清水亮, 2013, 「計画と開発のすきまから——人間不在の足跡を読む」吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣, 13-28.
- 鈴木広, 1986, 『都市化の研究』恒星社厚生閣.
- 高木恒一, 2012, 『都市住宅政策と社会——東京圏を事例として』立教大学出版会.
- 竹中英紀, 1998, 「ニュータウンにおける住宅階層問題の構造」倉沢進先生退官記念論集刊行会編『都市の社会的世界』.
- 玉野和志, 2009, 「都市の空間構造——コミュニティの社会的形成」玉野和志・浅川達人編『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院, 55-79.
- 浦川邦夫, 2011, 「幸福度研究の現状」『日本労働研究雑誌』612: 4-15.

-
- vi $\alpha=1\%$ 水準で「自治会・消防団」、「文化・趣味・スポーツなど」、「地域のお祭り・盆踊り」、 $\alpha=5\%$ 水準で「市民グループ・NPO団体」、 $\alpha=10\%$ 水準で「福祉グループ」が統計的に有意であった。
 - vii 多摩市以外の地域における世代間交流の実証研究については、例えば大槻(2014)を参照されたい。
 - viii 「福祉グループ」と「市民グループ・NPO団体」への参加世代間交流に結びつきが多く、多くの地区で弱いことは、そうした組織への参加が地域形成に寄与していないこと意味しているわけではない。むしろ、そうした組織に異なる年齢の人々をいかにしてよびこませるか、その回路こそが地区を超えた共通の課題となっていることが示唆されていると考えられる。
 - ix かつての東京都南多摩郡の群域に相当するエリアである。

巻末付録 調査票

多摩市のまちづくりと福祉にかんする調査

調 査 票

平成25年度 大妻女子大学人間生活文化研究所採択プロジェクト

2013年 9月

【調査プロジェクト組織】

代表	大妻女子大学人間関係学部准教授 (多摩市地域包括支援センター運営協議会委員)	石田 光規
	大妻女子大学人間関係学部教授	久保田 滋
	首都大学東京都市政策コース助教	大槻 茂実
	大妻女子大学大学院人間文化研究科博士課程	林 明子
	立教大学大学院社会学研究科博士課程	井上 公人

【お答えいただくにあたってのおねがい】

1. 封筒のあて名のご本人がお答えください。
2. お答えは、指示にしたがって、あてはまる番号に○印をつけるか、数字などを記すかしてください。
3. すこし立ち入ったこともうかがいますが、どなたがどう答えたかわからない統計表のかたちで処理しますので、あてはまる質問にはすべてお答えください。
4. お答えがおわかりましたら、**9月20日（金）までに**、同封の封筒に入れて、ポストに投函してください。（切手は不要です。無記名でおねがいきます）
5. わからないことがございましたら、なんでもお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

調査事務局 大妻女子大学人間関係学部 石田光規（いしだ・みつのり）研究室
〒206-8540 東京都多摩市唐木田2-7-1
電話 042-372-9167（直通）
ファクス 042-372-9209
電子メール：isihida@otsuma.ac.jp

まず、あなたのくらしや地域について、おうかがいします

問1 あなたはふだん近所の人とどの程度のつきあいをしていますか。ひとつ〇をつけて下さい。

1 つきあいはない	2 あいさつする程度の人がある
3 立ち話をする程度の人がある	4 お互いに訪問しあう人がある

問2 ご近所（徒歩、自転車で行ける範囲）でAからDのようなおつきあいをする方は、何人くらいでしょうか。数字でお答えください。同居家族は含みません。

(A) 病気のときの身のまわりの世話を頼む

人

(B) 買い物などの日常の用事を頼む

人

(C) 個人的な悩みごとの相談をする

人

(D) 気晴らしにおしゃべりをする、出かける

人

問3 あなたが、日ごろ親しくし、頼りにしている家族・親族、友人・知人は、何人くらいでしょうか。その方のお住まいまでふだん使っている交通手段でかかる時間別に、数字で、同居家族も含めてお答えください。いない場合は空欄でかまいません。

(A) 家族・親族

同居・敷地内	30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上
<input type="text"/> 人				

(B) 友人・知人

同居・敷地内	30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上
<input type="text"/> 人				

問4 あなたは、つぎの移動手段を、どのくらいつかいますか。それぞれ、あてはまる番号に、ひとつずつ〇をおつけください。

	週の半分 以上	週に1度 くらい	月に1度 くらい	半年に 1度ほど	それ以下・ つかわない
(A) 自家用車・バイク	1	2	3	4	5
(B) 電車	1	2	3	4	5
(C) 路線バス	1	2	3	4	5

問5 あなたは、AからFのことを、おもにどこでなさっていますか。それぞれ、あてはまる番号を選んで、数字でお答えください。

1 徒歩・自転車圏内	5 他の東京都内
2 それ以外の多摩市内	6 神奈川県
3 隣接市(八王子、日野、町田、稲城、府中、川崎市多摩区)内	7 移動販売・通信販売
4 東京23区内	8 その他

(A) 日用雑貨・食料品の購入 (B) 電化製品・家具の購入 (C) 病院・診療所の利用

(D) 服飾品の購入 (E) 友人との会食 (F) 気分転換の外出

問6 あなたは、多摩市において、つぎの団体や活動に参加していますか。それぞれ、あてはまる番号に、ひとつずつ○をおつけください。

	積極的に参加している(していた)	参加している(していた)	参加したことはない
(A) 自治会(町内会)・消防団	1	2	3
(B) 青年クラブ・婦人会・老人会・PTA・子ども会	1	2	3
(C) 産業団体(商工会・観光協会・農協など)	1	2	3
(D) 文化・趣味・スポーツなどの団体・サークル	1	2	3
(E) 福祉のグループ活動(食事会など)	1	2	3
(F) 地域活性化の市民グループ・NPO団体	1	2	3
(G) 地域のお祭り・盆踊り	1	2	3
(H) 政治家の後援会・政党	1	2	3
(I) 社会福祉協議会	1	2	3

問7 あなたには、つぎのお知りあい(話をすることがあるくらい、よく知っている人)がいますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1 自治会・町内会の役員	2 民生委員	3 市の課長以上の役職者
4 市議会の議員	5 NPO・市民団体の役員	6 都議会の議員
7 国会議員	8 社会福祉協議会の職員	

問8 くらしのなかで、不安におもっていることがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください(いくつでも)。また、そのなかで一番不安だと思う番号も記してください。

1 身のまわりの世話をしてくれる人の確保	2 安定した仕事・収入の確保	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 一番の不安は <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; display: inline-block; margin: 5px;"></div> 番 () </div>
3 地区の将来	4 交通手段の確保	
5 家のあとつぎ	6 救急時の医療体制	
7 祖父母や両親の介護	8 子や孫の教育	
9 自然環境の破壊	10 その他 ()	

問9 多摩ニュータウンおよび一般社会にかんするつぎの見方や意見について、どのようにおもいますか。それぞれ、あてはまる番号に、ひとつずつ○をおつけください。

		そう思う	やや思う	あまり思わない	そう思わない
ニュータウン	(A) ニュータウン開発は、市に大きな利益をもたらした	1	2	3	4
	(B) ニュータウン開発は、全体としてみた場合、地元にとってよかった	1	2	3	4
	(C) ニュータウンのある多摩市は今後も活性化してゆく	1	2	3	4
一般社会	(D) 一般的に人は信頼できる	1	2	3	4
	(E) 人を助ければ、いずれその人から助けてもらえる	1	2	3	4
	(F) 努力をすれば報われる世の中だ	1	2	3	4

問10 あなたはつぎの地域に、どれだけ愛着を感じていますか。それぞれ、あてはまる番号に、ひとつずつ○をおつけください。

	感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない
(A) お住まいの地区周辺	1	2	3	4
(B) 多摩市	1	2	3	4
(C) 南多摩地域(八王子・日野・町田・多摩・稲城市)	1	2	3	4
(D) 東京都	1	2	3	4

問 11 あなたはこれからも、いま住んでいるところに住み続ける予定ですか。

1 住み続ける予定だ	<p>なぜ住み続けようと思いましたか。 あてはまる番号<u>すべてに○</u>をつけてください</p> <table border="1"> <tr> <td>1 職場・学校が近い</td> <td>7 友人・知人がいる</td> </tr> <tr> <td>2 福祉や病院が充実している</td> <td>8 家族や親戚がいる</td> </tr> <tr> <td>3 町の雰囲気が良い</td> <td>9 住み慣れた場所だから</td> </tr> <tr> <td>4 教育環境が良い</td> <td>10 引っ越しお金がない</td> </tr> <tr> <td>5 生活に便利</td> <td>11 引っ越し手間がかかる</td> </tr> <tr> <td>6 家の間取りが良い</td> <td>12 その他 []</td> </tr> </table>	1 職場・学校が近い	7 友人・知人がいる	2 福祉や病院が充実している	8 家族や親戚がいる	3 町の雰囲気が良い	9 住み慣れた場所だから	4 教育環境が良い	10 引っ越しお金がない	5 生活に便利	11 引っ越し手間がかかる	6 家の間取りが良い	12 その他 []										
1 職場・学校が近い	7 友人・知人がいる																						
2 福祉や病院が充実している	8 家族や親戚がいる																						
3 町の雰囲気が良い	9 住み慣れた場所だから																						
4 教育環境が良い	10 引っ越しお金がない																						
5 生活に便利	11 引っ越し手間がかかる																						
6 家の間取りが良い	12 その他 []																						
2 住み続ける予定はない	<p>なぜそう思いましたか。 → 引っ越し場所はどこですか。 あてはまる番号 <u>すべてに○</u>をつけてください → あてはまる番号に<u>ひとつだけ○</u>をつけてください</p> <table border="1"> <tr> <td>1 仕事がない</td> <td>1 徒歩・自転車圏内</td> </tr> <tr> <td>2 職場・学校が遠い</td> <td>2 多摩市内</td> </tr> <tr> <td>3 福祉や病院が不安</td> <td>3 近隣市内</td> </tr> <tr> <td>4 町の雰囲気が悪い</td> <td>4 東京 23 区内</td> </tr> <tr> <td>5 教育環境が悪い</td> <td>5 他の東京都内</td> </tr> <tr> <td>6 生活が不便</td> <td>6 東京以外の南関東</td> </tr> <tr> <td>7 家の間取りが不満</td> <td>7 具体的などころはない</td> </tr> <tr> <td>8 友人・知人が少ない</td> <td>8 その他 []</td> </tr> <tr> <td>9 家族や親戚と同居する</td> <td></td> </tr> <tr> <td>10 転勤の可能性が高い</td> <td></td> </tr> <tr> <td>11 その他 []</td> <td></td> </tr> </table>	1 仕事がない	1 徒歩・自転車圏内	2 職場・学校が遠い	2 多摩市内	3 福祉や病院が不安	3 近隣市内	4 町の雰囲気が悪い	4 東京 23 区内	5 教育環境が悪い	5 他の東京都内	6 生活が不便	6 東京以外の南関東	7 家の間取りが不満	7 具体的などころはない	8 友人・知人が少ない	8 その他 []	9 家族や親戚と同居する		10 転勤の可能性が高い		11 その他 []	
1 仕事がない	1 徒歩・自転車圏内																						
2 職場・学校が遠い	2 多摩市内																						
3 福祉や病院が不安	3 近隣市内																						
4 町の雰囲気が悪い	4 東京 23 区内																						
5 教育環境が悪い	5 他の東京都内																						
6 生活が不便	6 東京以外の南関東																						
7 家の間取りが不満	7 具体的などころはない																						
8 友人・知人が少ない	8 その他 []																						
9 家族や親戚と同居する																							
10 転勤の可能性が高い																							
11 その他 []																							

問 12 あなたは近所に住んでいる人とどのようにおつきあいたいですか。 ひとつ○をつけて下さい。

1 相談のできる親密なつきあいをしたい	2 気軽に頼みごとのできるつきあいをしたい
3 あいさつしていどのつきあいやすい	4 あまりおつきあいはしたくない

問13 以下のことがらについて、ここ最近のことを考えながら、**あてはまる番号に、ひとつずつ○**をおつけください。

	そう 思う	そう や や	そう あ あまり 思 わ な い	そう 思 わ な い
(A) 今の生活に満足している	1	2	3	4
(B) まわりの人にめぐまれている	1	2	3	4
(C) 人生をむなしものだと感じる	1	2	3	4
(D) 時々ふとさびしくなる	1	2	3	4
(E) 人とかかわるのはおっくうだ	1	2	3	4
(F) 健康には自信がある	1	2	3	4

問14 あなたは生活している地域で、家族以外に以下のような年代の方との交流はありますか。
あてはまる番号に**ひとつずつ○**をおつけください。

	よ く あ る	た ま に あ る	な い	ほ と ん ど	ま つ た く な い
(A) 10代未満の人との交流	1	2	3	4	
(B) 20代～30代との交流	1	2	3	4	
(C) 40代～50代との交流	1	2	3	4	
(D) 60代以上との交流	1	2	3	4	

行政や政治について、おうかがいします

問15 多摩市が提供するサービス活動・機関についておたずねします

(A) 以下のサービス活動・機関について**知っているものすべてに○**をつけてください。

1 学童クラブ	3 地域包括支援センター	5 健康・栄養相談
2 市民相談	4 市民活動情報センター	6 消費生活センター

(B) 以下のサービス活動・機関について**利用したことのあるものすべてに○**をつけてください。

1 学童クラブ	3 地域包括支援センター	5 健康・栄養相談
2 市民相談	4 市民活動情報センター	6 消費生活センター

問16 あなたは、つぎの見方について、AとBのどちらの意見に近いですか。それぞれ、あてはまる番号にひとつずつ〇をおつけください。

【Aの意見】		Aに近い	Aに近い どちらかといえば	Bに近い どちらかといえば	Bに近い	【Bの意見】
①	地域の問題は、住民がじぶんたちの力で解決すべきだ	1	2	3	4	地域の問題は、行政が責任をもって解決すべきだ
②	国は地方のことを考え、金や仕事を地方に回すべきだ	1	2	3	4	地方は国に頼らず、自分たちで地域づくりを進めるべきだ
③	生活に困っている人たちに手厚く福祉を提供する社会をめざすべきだ	1	2	3	4	自分のことは自分で面倒をみるように、個人が責任をもつ社会をめざすべきだ
④	所得をもっと平等にすべきだ	1	2	3	4	個人の努力を促すため所得格差をもっとつけるべきだ
⑤	競争は、社会の活力や勤勉のもとになる	1	2	3	4	競争は、格差を拡大させるなど、問題のほうが多い
⑥	経済成長率がある程度低下しても、環境保護が優先されるべきだ	1	2	3	4	環境がある程度悪化しても、経済成長が優先されるべきだ
⑦	物事を決める際、リーダーシップによるすばやい決定が重要だ	1	2	3	4	物事を決める際、時間をかけてみんなで話しあい、納得した結論を導くことが重要だ
⑧	地方自治体の首長を選ぶなら、たとえ素人でも市民の代表がよい	1	2	3	4	地方自治体の首長を選ぶなら、市民の代表ではないが行政のプロがよい

問17 あなたはふだん何党を支持していますか。あてはまる番号にひとつ〇をおつけください。

1 自民党	2 民主党	3 公明党	4 共産党	5 社民党
6 みんなの党	7 日本維新の会	8 その他	9 支持政党なし	

問18 あなたは、つぎの機関の活動について、どれだけ関心がありますか。また満足していますか。それぞれひとつずつ〇をおつけください。

	関心 (ひとつずつ〇)			満足 (ひとつずつ〇)		
	関心がある	どちらとも いえない	関心がない	満足している	どちらとも いえない	不満だ
(A) 自治会・町内会	1	2	3	1	2	3
(B) 社会福祉協議会	1	2	3	1	2	3
(C) コミュニティセンター	1	2	3	1	2	3
(D) 多摩市役所	1	2	3	1	2	3
(E) 東京都庁	1	2	3	1	2	3

さいごに、あなたご自身について、おうかがいします

問19 あなたの性別に〇をつけてください。また、年齢を数字でご記入ください。

1 男性	2 女性	満		歳
------	------	---	--	---

問20 いま結婚していますか。あてはまる番号にひとつだけ〇をおつけください。

1 未婚	2 既婚 (事実婚も含む)	3 結婚したが死別	4 結婚したが離別
------	---------------	-----------	-----------

問21 あなたがさいごに卒業した学校 (在学中を含む) はどちらですか。あてはまる番号にひとつ〇をおつけください。(旧制の場合は「その他」に具体的にお書きください)

1 中学校	2 高校	3 短大・高専・専門学校	4 大学	5 大学院
6 その他 (具体的にお書きください) _____)				

問 22 あなたのご健康についておうかがいします。

(A) 昨年1年間でどのくらい通院しましたか。あてはまる番号に、ひとつだけ〇をおつけください。ただし歯科の通院は除きます。

1 週に1回以上	2 月1回くらい	3 半年に1・2回	4 年に1回	5 通院していない
----------	----------	-----------	--------	-----------

(B) この1ヶ月間、つぎのような症状がみられたことはありますか。あてはまる番号にひとつづつ〇をおつけください。

	しばしばある	ときどきある	あまりない	めったにない
(A) からだがだるくて動きにくい	1	2	3	4
(B) 一日中あたまがぼんやりする	1	2	3	4
(C) いらいらした気分がつつく	1	2	3	4

問 23 あなたは、これまでに家族を介護した経験がありますか。あてはまる番号に、ひとつだけ〇をおつけください。

1 現在おこなっている	2 過去にしたことがある	3 したことがない
-------------	--------------	-----------

問 24 あなたは、どちらでお生まれになりましたか。あてはまる番号にひとつ〇をおつけください。また、多摩市内にお住まいの年数についても、数字でおしえてください。

1 今と同じ	5 他の東京都内
2 それ以外の多摩市内	6 神奈川県
3 隣接市（八王子、日野、町田、稲城、府中、川崎市多摩区）内	7 千葉・埼玉県
4 東京23区内	8 その他

多摩市に住んで通算

⋮

 年

問 25 あなたは、親の世代も含め、いつから多摩市内に住居をかまえていますか。あてはまる番号にひとつだけ〇をおつけください。(分家された場合は、その時点をお答えください)

1 明治時代よりも前	2 明治時代	3 大正時代から戦前	4 昭和20年代
5 昭和30年代	6 昭和40年代	7 昭和50年代	8 平成以降

問26 いまのお住まいについて、おうかがいします。

(A) お住まいの物件について、あてはまる番号をひとつ選び○をつけてください。

1 戸建ての自宅	6 民間の賃貸住宅
2 分譲マンションの自宅	7 社宅・寮・公務員住宅
3 公団・公社の賃貸	8 その他
4 都営住宅	

(B) おおよその面積を数字でお答えください。 平方メートル

問27 つぎのなかから、同居しているご家族をすべて選んで、番号に○をつけてください。

① あなたご自身	5 子どもの配偶者	9 祖父母
2 配偶者(夫・妻)	6 孫	10 あなたまたは配偶者の兄弟姉妹
3 未婚の子	7 あなたの親	11 その他()
4 結婚している子	8 配偶者の親	

問28 お子さんはいますか。いる場合は、お子さんの性別、年齢、お仕事、お住まいを、それぞれ数字でご記入ください。

1 いる () 人 2 いない →問29へ

	お子さんの性別 (数字に○)	お子さんの年齢 (数字で)		歳	お子さんのお住まい(数字で)	
		男	女		1 同居・敷地内	5 他の東京都内
例	1 男 <u>2</u> 女	4	5		4	
	1 男 2 女					
	1 男 2 女					
	1 男 2 女					
	1 男 2 女					
	1 男 2 女					

問 29 あなたと配偶者のお仕事について、下の表にそれぞれ数字でおこたえください。

(A) 現在働いていますか

1 働いていない (学生・主婦・主夫・求職中など)	2 定年で引退した	3 働いている
---------------------------	-----------	---------

(B) おもなお仕事は (2「定年で引退した」方は当時のおもなお仕事をお答えください)

1 臨時雇用・パート・アルバイト	4 自営業主または家族従業者
2 派遣社員・契約社員・請負業務・委託業務	5 経営者・会社役員・団体役員
3 正規雇用されている一般社員・一般職員 (公務員・教員を含む)	6 その他 具体的に： []

(C) お仕事の種類は (2「定年で引退した」方は当時のおもなお仕事をお答えください)

1 専門職 (教員、医師、看護師、技術者など)	5 サービス職 (料理人、旅館、理容師、ウエイトレスなど)
2 管理職 (会社役員、課長以上の管理職、議員など)	6 生産工程・労務、保安職 (工場・土木作業、運転手、警察官など)
3 事務職 (総務・企画・経理事務、コンピューターのオペレーターなど)	7 農林漁業 (農業、山林労働、漁業、造園など)
4 販売職 (小売店、保険の外交員など)	

(D) お仕事先の規模は (2「定年で引退した」方は当時のおもなお仕事をお答えください)

1 1～4人	3 30～99人	5 1000人以上
2 5～29人	4 100～999人	6 官公庁

(E) お仕事先の場所は (2「定年で引退した」方は当時のおもなお仕事をお答えください)

1 多摩市	5 神奈川県
2 隣接市 (八王子、日野、町田、稲城、府中、川崎市多摩区) 内	6 千葉・埼玉県
3 東京23区内	7 その他
4 他の東京都内	

【記入表】

	記入例	あなた	配偶者
(A) 仕事の有無	2		
(B) おもなお仕事	3		
(C) 仕事の種類	1		
(D) 仕事先規模	4		
(E) 仕事の場所	3		

「いない」ならば問30へ

1「働いていない」ならば配偶者欄へ

1「働いていない」ならば問30へ

問30 あなたは、以下の誌面をどのくらい読んでみますか。あてはまる番号に、ひとつだけ○をおつけください。

	目を通す ひととおり	む ころだけ読 気になる	読まない ほとんど	まったく 読まない
(A) たま広報 (多摩市発行の広報誌)	1	2	3	4
(B) 広報 東京都 (東京都の広報誌)	1	2	3	4
(C) 新聞の社会面・政治面	1	2	3	4

問31 あなたは以下の機器を利用されていますか。利用されているものすべてに○をおつけください。

1 パソコンのインターネット	2 スマートフォン	3 携帯電話
----------------	-----------	--------

問32 昨年1年間(2012年1~12月)の収入は、税・社会保険料込みでつぎの中のどれに近いですか(臨時収入・年金収入を含む)。あなたご自身の収入と、あなたを含む同居されているご家族全体の収入について、あてはまる番号に、ひとつだけ○をおつけください。

あなたご自身	ご家族全体
<input style="width: 100px; height: 20px;" type="text"/>	<input style="width: 100px; height: 20px;" type="text"/>
↑	↑
番号を記入	番号を記入
↓	↓

1 なし	5 600万円以上800万円未満
2 200万円未満	6 800万円以上1000万円未満
3 200万円以上400万円未満	7 1000万円以上1500万円未満
4 400万円以上600万円未満	8 1500万円以上

長時間にわたってご協力いただきまして、まことにありがとうございました。

同封の封筒に入れて、9月20日(金)までにご投函ください。(切手不要)